

はじめに



枕本 育生（すぎもと いくお）

（環境市民チーフコーディネーター・
（みやこ）京のアジェンダ21フォーラム幹事長代理）

エコツアー、エコツーリズムという名称とコンセプトが、欧米で広まりだしたのは一九八〇年代後半、特に中米のコスタリカにおいて熱帯林の保全も兼ねた持続可能な観光の実践として注目されるようになりました。もちろんそれ以前にイギリス、フランス、ドイツなどで田舎の旅（ルーラルツーリズム）、農村の旅（グリーンツーリズム）として一九六〇年代から行われていました。また、イギリスのナショナルトラスト協会によるワーキングホリデーやアメリカのシエラクラブによるナショナルパークの旅などNGOによるツアーは行われていましたが、エコツアーという名称は使われていなかったようです。

エコツアーは、マスツーリズムが世界的に広がることにより、観光開発という自然破壊や観光公害が世界的なものとなったことへの対応として、また第三世界における持続可能な地域開発のあり方のひとつとしてあらたな観光のスタイルに应运てだされてきたものです。それとともに環境への意識の高まりから田舎の旅、農村の旅もエコツアーとしてとらえなおされるようになりました。

エコツアーの定義はいろいろとなされていますが、国際自然保護連合（IUCN）では途上国の自

然保護資金を生み出すものであること、地域社会の新たな経済手段を創りだすこと、地域住民と観光客に対して環境教育の場を提供するものであること、という三点をあげています。これは初期におけるエコツアーのコンセプトを端的に表していますが、これでは日本国内においてエコツアーは成り立たなくなりそうです。その後、いわゆる先進国内においてもエコツアーは可能であるということが認識されるようになり、例えば日本自然保護協会は、「旅行者が生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく自然地域を理解し、觀賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設及び環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」と定義づけています。最近、日本においてもエコツアーと銘打った旅行がかなり見かけられるようになりましたが、その中身をみると多くは自然体験ツアーと言ったほうが適切であり、このようなエコツアーの定義からはみ出してしまうものがほとんどという状態です。

さて、日本でも一九九〇年代前半から環境団体を中心にエコツアーの取り組みが始まりました。京都においてもエコツアーの取り組みを初期から行ったのはユースホステル協会と環境市民などではないかと思えます。ユースホステル協会では、旅行者を受入れるという立場からソフト面、ハード面両方にわたる取り組みをすすめています。

環境市民では、一九九三年からエコツアーの実践的研究を開始しました。国内では屋久島、美山・芦生、石垣・白保、北アルプス・キャンプ、高知・四万十川、木曾・開田高原、岩手・賢治の故郷へ、海外ではスイスアルプス・トレッキング、ニュージーランド・原始の森、モルディブ・珊瑚の海、ドイツ・スイス環境視察、ドイツ・スウエーデン環境視察と、環境市民が企画したツアーを実施し、その経験と参加者の意見等をベースに、エコツアーのあり方について検討を重ねました。

また一九九四年から一九九六年にかけてトヨタ財団から研究助成を受けて「修学旅行のエコロジー化」について調査研究しました。これは京都が日本最大の観光都市であり、旅行の受け手としての調査研究が必要であったこと、また団体旅行においてエコツアーが可能かということを検証するもので

した。その調査研究の成果を活かしながら、毎年、半日から一日のツアーを数校から依頼を受けて実施しています。

これまでの調査研究の結果として必ずしも訪問地は自然豊かなところである必要はない、むしろエコツアーかどうかはその旅のスタイルによるのではないかと、環境市民では考えるようになった。それゆえ京都のような大都市においてもエコツアーが可能であり「アーバン・エコツーリズム」というコンセプトを打ち出し、観光とまちづくりをリンクしてより環境負荷の少ないものへとしていく考えを提唱しています。

そして一九九七年の「京のアジエンダ21」の策定時に京都の持続可能なまちづくりの重要な柱の一つとして、エコツーリズムが必要ではないかという提案をいたしました。幸いにも京のアジエンダ21検討委員会の委員全員がその提案を支持され、五つの重要な取り組みの一つとして「エコツーリズム都市づくり」が位置づけられました。そして、京のアジエンダ21フォーラムの設立時から、エコツーリズムワーキンググループが設けられ、より広範な市民、事業者、大学、市等が京都におけるエコツーリズムの開発と普及に取り組まれることになりました。

また二〇〇二年春に開館予定の京都市環境保全活動センター（愛称、京エコロジーセンター^{みせ}）でもエコツアー関係の情報が提供される予定です。

今後京都におけるエコツーリズムの発展には、交通システム、宿泊施設、旅行関連産業のソフト及びハード面の改善とともに、京都に住んでいる人々が、京都を楽しめる、そして持続可能なまちづくりをすすめていくことが重要ではないかと思えます。一朝一夕でなる話ではありませんが、すべての条件が整わなければエコツアーができないということでもありません。事業者、NGO、市等の様々な具体的な取り組みと、京のアジエンダ21フォーラム等でのそれらの連携があれば、確実な前進がみられることと思います。「二十一世紀の京都の観光はエコツアー」をぜひ実現させようではありませんか。



目次

はじめに	3
1 エコツーリズム都市・京都に向けて	
1 序論	
これからのエコツーリズム都市・京都	10
2 まちづくりと環境・観光	
まちづくりと観光・環境 ～ はばひろい市民の参加を～	16
エコシティ エコ・ツーリズム エコ・ミュージアム	22
まちづくりと観光・環境 ～ 市民活動・観光事業者・行政のパートナーシップ～	26
3 修学旅行と「環境学習」「総合的な学習」	
京都の「エコ修学旅行」	30
京都の修学旅行を「総合的な学習」で活性化させよう	36

4	交通とエコツーリズム	中川大	42
	都心の交通環境とエコツーリズム	藤井聡	48
	景勝地・観光地の交通		
5	旅館・ホテルのエコ化	下村委津子	54
	旅館・ホテルのエコ化	旅人の視点から	
	環境にやさしい宿泊施設へ	宿泊施設の問題に関する宿泊客の意識	十倉真未子
	旅館・ホテルのエコ化	大学生の目を通して見えたもの	
		立命館大学産業社会学部 深井研究室三回生	
	旅館・ホテルのエコ化	事業者側から	宇多野ユースホステルでの取り組み
			高田光治
6	総論		
	21世紀を開く京都のエコツーリズム	宗田好史	76
2	パートナーシップで築く京都のエコツーリズム		
	パートナーシップで築く京都のエコツーリズム		
	エコツーリズムワーキンググループの取り組み紹介と提案		
	京のアジエンダ21フォーラムエコツーリズムワーキンググループ		82



1 エコツーリズム都市・ 京都に向けて

これからの エコツーリズム都市・京都

岡田 知弘（おかだ ともひろ）

（京都大学大学院経済学研究科 教授）

1. 序論

エコツーリズム都市とは？

エコツーリズム都市というのは、聞きなれないことばである。エコは、生態や環境を意味するエコロジーを表現し、ツーリズムは旅行・観光の意味である。したがって、エコツーリズムを文字通りに解釈すると、「自然環境を大切にした観光」ということになる。

したがって、どちらかといえば自然が豊かな農村を対象にした観光のあり方を連想させるが、これを京都という大都市で実現しようという取り組みがなされている。出発点は、一九九七年に京都で開かれたCOP3であり、これを契機に市民・事業者・行政が一体となった「京のアジエンダ21」がまとめられた。このなかで、エコツーリズム都市・京都に向けた提言が盛り込まれている。

もともと、大都市における観光振興とエコロジーとは、そう簡単に両立するものではない。観光振興ということで観光客をたくさん誘客すると交通渋滞がおき、自動車の排気ガスやゴミのポイ捨てなどの観光公害が生じ、環境面だけではなく市民生活や他の産業活動にも迷惑がかかる。他方で、環境

を第一にして、自動車の乗り入れを規制したり、接客サービスを環境面からチェックすると、観光客が来なくなるのではないかという不安がある。

テーマパークであれば、単一の経営体が、観光とエコロジーとを統一して運営することができる。ところが、京都のような大都市では、観光業は都市経済を担う産業のひとつにすぎず、観光とは直接関係のない市民や企業が存在している。このため全市民が観光客の増加を期待しているわけではない(表1)。しかも、観光客の方は、市民の日常生活を含む都市景観全体を、観光活動の対象としており、テーマパークのようにはいかないのである。

では、このグローバル競争の時代において、環境を大切に、市民生活の向上とも結びつけた観光振興は、果たして可能なのだろうか。可能だとすれば、何が条件なのか。この点を、京都の持続的発展という視角から、考えてみることにしたい。

注目を浴びる観光業

近年、京都市は、観光業を「重要戦略産業」として位置づけている。これまで京都経済を支えてきた和装産業が急激に崩壊しているに加え、金属加工型産業の工場閉鎖が相次ぎ、製造業が縮小する一方で、商業においても商店街の衰退が顕著となっている。このような京都市経済を再生する切り札として、観光業に熱い視線が注がれているわけである。

具体的目標として二〇一〇年までに観光客を五〇〇〇万人台にのせ、観光業を京都市の基幹産業にする計画が立てられている。

ところで、一口に観光業といっても、その範囲は広い。通常、宿泊、飲食、みやげ、交通、文化施設、娯楽施設、駐車場、石油小売、需要観光地の商店街、百貨店を含めて観光業と名づけている。これらの業種分布からわかるように、観光と製造業(ものづくり)、商業は、互いに対立するものではなく、相互に補完しあう複合的な構造をもっているといえる。したがって、京都の観光都市としての

表1 観光客がこの地区を訪れることに対してどう思うか

	観光業者	非観光業者	不明
より多く訪れて欲しい	71.4	27.3	57.1
現状のままでよい	21.4	54.5	28.6
観光客は多少減って欲しい	3.6	15.2	0
訪れて欲しくない	0	3	14.3
その他	3.6	0	0

京都大学経済学部岡田ゼミナール学生によるアンケート結果。
1999年12月～2000年1月にかけて、清水地区で実施、回答数68人。

クオリティー（質）が高まれば、それだけ他産業への波及は大きいということにもなる。また、京都の観光業は地域産業としての性格が強い。旅行需要が減少したからといって、観光資源ごと海外に移動することはできない。したがって、京都の観光業は、京都の土地に固着した寺社仏閣といった歴史の遺産や歴史的景観・自然景観を主たる観光資源として、観光客に交通、宿泊、飲食、土産物を供給する産業複合体と特徴づけることができるであろう。

観光客数の停滞と観光客のニーズ

京都市を訪れる観光客数は、阪神大震災後持ち直してきているとはいえ、一九九〇年の四〇八五万人を回復するまでには至っていない。観光消費額もまた同様である。この原因として通常指摘されているのは、海外旅行の急増、国内でのテーマパークの台頭、修学旅行など団体旅行者の減少、モータリーゼーションの進行、旅行スタイルの変化（「みる」観光から「する」観光へ）という諸点である。ここから、従来の観光資源に依存しない「新しい集客装置」必要論も出てくる。だが、観光客数の停滞は京都に限ったことではなく、全国的に共通した現象である。根本的な原因は、一〇年に及ぶ長期不況によって、家計収入が低迷し、旅行支出が減少しているところにある。

京都に即して考えるとき、そもそも観光客は何を求めて京都に来るのか、正確に見ておく必要がある。京都は、日本最大の観光都市であり、繰り返して来るリピーターが多いことでも有名である。京都市が毎年行っている観光客アンケートを見ると、彼らがもっとも高く評価しているのは、風景、名所旧跡、自然、文化財である。なかでも、清水寺から銀閣寺にかけての東山界隈と嵐山は、人気のトップを占める。観光客は、どこにもあるような集客装置ではなく、京都らしさの真髄である歴史・文化的な価値を求めて繰り返しやってくるのである。グローバル競争の時代であるからこそ、世界のどこにもない観光資源を磨き上げることで、都市としての持続的発展が可能となるといえる。

エコツーリズムの必要性

では、具体的に、どのような方向で観光を振興すればよいのだろうか。そのヒントは、観光客や市民が京都の観光に対して日頃感じている不満のなかにある。

例えば、前述した京都市の観光客向けアンケートや私の学生ゼミナールの調査によると、観光客の不満の多くは、交通、町並み、トイレ・駐車場施設に向けられている。とりわけ、交通については、モーターゼーションの進行のなかで、マイカー利用旅行者が三割を占めるようになっており、観光シーズンになると道路の大渋滞がおき、バスやタクシーなども身動きがとれなくなるなど、不満の声が強い。しかも、交通問題は、排気ガスの増大にともなう大気汚染に直結する環境問題でもある。

また、バブル期以降の町並みの破壊も、観光資源の喪失・劣化として観光客がとらえていることも注目される。町並みは、個々の家屋を構える世帯や経営体の経済力によって、支えられる。和装産業や個人小売業の不振は、家屋の維持・更新を不可能にし、更地や駐車場化が進行して町並みが崩れていくことになる。観光業の振興と、製造業など他産業の振興が、町並みの形成という点で一体化しているところに、京都の観光資源の特徴がある。

他方で、京都市民は、観光に何を期待し、何に不満をもっているのだろうか。私の学生ゼミナールが行ったアンケートによると、京都市民の多くが、観光業の振興を求める一方で、観光公害、町並みの破壊について問題視していることがわかった。例えば、観光公害についての質問に対し、「大変困っている」と答えた人が三八%、「少し困っている」と答えた人が四四%というように、八割以上の市民が何らかの不満をもっているのである。観光客の旅行マナーを向上させる生涯学習の場としても、京都の観光業はその役割が期待されているといえる。とりわけ、修学旅行は、旅行マナーと環境問題の学習の場として積極的に位置づける必要があるのではないだろうか。

次に、京都の観光業界内部に注目すると、とくに宿泊業において旅館の激減と市外から進出してき

ているチェーン・ホテルの急増が目立つ。京都を訪れる観光客の数が増え、観光消費額が増加したとしても、それがすぐに京都市内に循環し、京都経済を潤すことにはならないのである。むしろ、近年は、京都の観光資源に注目した市外資本の参入により、観光消費の果実は市外に流出する傾向が強まっているといえる。

一九八九年の「第三次京都観光基本調査」によると、ホテルの水道光熱費ウエイトが、旅館に比べかなり高いうえ、シーツリネン、清掃などを含め、環境関連コストが全体として大きな比重を占めていることが確認できる。他方、「京のアジエンダ21フォーラム」のワーキンググループが一九九九年に実施した「宿泊施設における環境問題に関するお客様アンケート」によると、観光客の環境意識はおおむね高く（表2）、ポンプ式容器液体石鹸の導入をはじめとする宿泊施設の環境対策に賛同する観光客が比較的多いことがわかる。すなわち、宿泊施設などでの環境を考慮したサービスの導入は、観光客の賛同を得られるだけでなく、環境関連コストの削減による経費節減効果も併せもつといえる。

以上から、京都の観光振興と市民の生活向上をとともに達成するには、交通規制やトイレ・駐車場の整備、ポイ捨てごみ対策、観光施設等での環境対策、町並みの再生といった、一連の環境問題や景観問題への積極的対応、つまりエコツーリズムの実現がカギになっているといえる。また、観光業振興の経済効果を、地域内に循環させるシステムを創出することにより、観光業の振興と地域経済の再生を結びつける必要がある。さらに、マイカー観光を制限し、公共交通機関と自転車・徒歩交通を連結した分散ネットワーク型の観光ルートを開発することも大きな課題である。

観光都市・京都を永續させるための条件

最後に強調したいのは、住民が元気に生活し、環境や景観を大切にしたい街に、旅人は繰り返しやって来るといふことである。市民の生活空間自体が観光資源となっている京都の場合は、なおさらである。京都が世界的な観光都市として生きつづけるには、市民生活の基盤となる製造業や商業をはじめ

表2 観光分野においても、環境問題への対策は必要か

少々不便でも、積極的な取り組みが必要	37.8
不便のない程度での積極的な取り組みが必要	44.5
社会の風潮を考えると最小限の取り組みは必要	11.6
観光はある種のぜいたくであり、環境対策は必要でない	1.5
その他・無回答等	4.4

京のアジェンダ21フォーラム・エコツーリズムワーキンググループ・
エコロジーチェックグループ
『『宿泊施設における環境問題に関するお客様アンケート』の結果報告』
1999年12月



とする産業の再生や福祉の充実、観光業の振興とを併せて追求しなければならない。観光と、ものづくり、商売、福祉、まちづくりは、一体のものだからである。その実現のためには、市民、事業者、行政の協同が必要不可欠である。

2. まちづくりと環境・観光

まちづくりと観光・環境 はばひろい市民の参加を

西村 仁志 (にしむら ひとし)

環境共育事務所カラーズ主宰・
京のアジェンダ21フォーラム幹事

手本示したい京都

「エコツーリズム」とは、過剰な観光客によって風光明媚な自然や地元のひとびとの生活文化に大きなインパクトをもたらしたり、水やエネルギーなどの資源を大量消費・大量廃棄していくような観光のあり方「マス・ツーリズム」への反省から生まれた新しい観光と地域づくりへの取り組みである。自然資源を大切にし、かつ地域経済の自立的、持続的發展に貢献することをめざしている。

日本自然保護協会の「エコツーリズム・ガイドライン」によれば「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」とであると定義されている。

海外での先進的なエコツーリズムへの取り組みは、貴重な原生自然そのものが観光資源となつているコストリカヤガラバゴス諸島、オーストラリアなどで始まっている。このような場所では観光客に

よる過剰な利用が、観光資源である自然そのものを荒らしてしまうために、保護と利用のバランスをとることが大きな課題となったからである。

またローコストで低エネルギーな旅のルーツはヨーロッパでの農村への長期滞在や自転車、徒歩での旅、アメリカの「バックパッキング」などに求めることができるだろう。このような旅のスタイルは、短く忙しい日程で観光地から観光地へとバスで移動する日本の団体ツアーのスタイルとは対極にあるものだ。

エコツーリズムの概念として、1. 資源の持続なくして観光は成立しない。2. 地域住民の参画なくして資源は守れない。3. 経済効果なくして住民の参画は望めない。ともいわれている。観光産業と環境保護、地域振興が歩み寄り、この三つがバランスのとれたかたちになっていくことが望ましいわけだ。

パッケージツアー全盛であった日本でも一九九〇年代にエコツーリズムへの取り組みが屋久島や西表島、小笠原などの島々や、原生自然の残る北海道などでほぼ同時期にはじまった。数名〜十数名の小人数の参加者を対象にし、地元のネイチャーガイドの案内でハイキングやカヌー、ダイビングなどの手段を用いて、より深く自然にふれあうツアーがいまも盛んに行われている。

一方、京都は人口一四五万人もの大都市であり、また世界中から年間四〇〇〇万人もの観光客を受け入れている国際観光大都市である。島や熱帯雨林など原生自然への観光と都市の観光は一見異質のようには思われるかもしれない。しかし京都の観光産業は経済の一角を担う重要な産業であると同時に、水やエネルギーを消費し、交通渋滞を引き起こし、ごみを大量に発生するなど、京都の環境への大きな影響をもたらす要素でもある。そしてこのまま大量消費型の観光が拡大していくと、京都は観光都市としての魅力を失いかねない。この点では都市であっても原生自然であっても、観光資源を後世まで持続させていくために環境調和型観光への転換をはかるのが共通した課題である。そして一九九七年に京都では、観光の形態を環境に配慮したものに変わっていくことが、市民参加

型で策定された京都市全体の総合的な環境計画である「京のアジェンダ21」に明記されたのである。

ところがこのような大都市でのエコツーリズムのお手本は、日本ではまだどこにも求めることができない。つまり京都がオリジナルな都市型のエコツーリズムのしくみを創出していく必要があるということである。これは運輸・宿泊・飲食・物販・旅行代理店などの観光事業者が省エネルギーやごみ減量などに取り組んでいくことはもちろん、市民や行政も連携しながら取り組んで行かねばならないことは明らかである。では私たち市民は、観光にどのように関わればよいのだろうか。

旅人と京都をつなぐ橋渡し役

京都観光の魅力は、数々の神社や寺院などの歴史的建造物はもちろんのこと、一二〇〇年にわたって営まれてきた自然と人間のかかわりの歴史そのものだといえる。「山紫水明」に象徴される豊かな自然環境が芸術や文学、宗教などの文化を育み、またそれらの文化が京都の豊かな自然を後世にまで残してきたという、自然と文化が相互に育みあう関係に大きな価値がある。また東京や大阪等の巨大都市とは違った「ゆったりとした時間の流れ」を感じることもできるといっても大切な要素だ。このように考えてみると京都観光は拝観料を納めて次々と社寺を巡る「点から点」の旅から、面的な広がりや深まりを持つことができる。町並みのなかや鴨川、桂川のほとりを時間をかけて歩いたり、大文字山に登り市内を眺望してみたり、一日をかけて鞍馬や貴船にでかけてみれば心と身体でそのことが実感できる。つまりこのような時間の過ごし方は旅のメニューのひとつになり得るのだ。(実際これらのメニューは修学旅行生を対象にした環境学習プログラム「エコ修学旅行プログラム」として実施されている。(第二章「京都の「エコ修学旅行」参照)

旅人がこのような過ごし方をするときには、その興味や関心を引き出したり、五感を研ぎ澄ませ、感性を豊かにしたり、旅人同士や地元の人々との関わりを豊かにする役割がたいへん重要になってくる。旅人と京都をつなぐ仲人役、橋渡し役だ。これはプロのガイドだけではなく、あらゆる市民が関

わっていける役割である。

欧米の自然公園や博物館などでは「インタープリター」という役割の人々が活躍している。直訳すると「通訳」という意味だが、ここでは言語の通訳ではなく、自然や展示物の奥底にある意味を伝えるという役割である。例えば「木」は人間の言葉を喋らないから、インタープリターがその木になりかわって、その木の特徴、歴史、周囲との関わり、四季の移ろいなどを解説したり、来客に実際に触れさせたり、匂いを嗅がせたりという実体験を通して、その木の意味を伝達するのだ。

京都には町家や歴史ある建造物、社寺とその境内林、大小の河川、町並み、景観や眺望、街路樹や生け垣など、まち全体が博物館ともいえるほどの資源がたつぷりあるわけだから、地元のわれわれが「インタープリター」としてこれらの隠れた「光」との橋渡し役を務めていけるだろう。

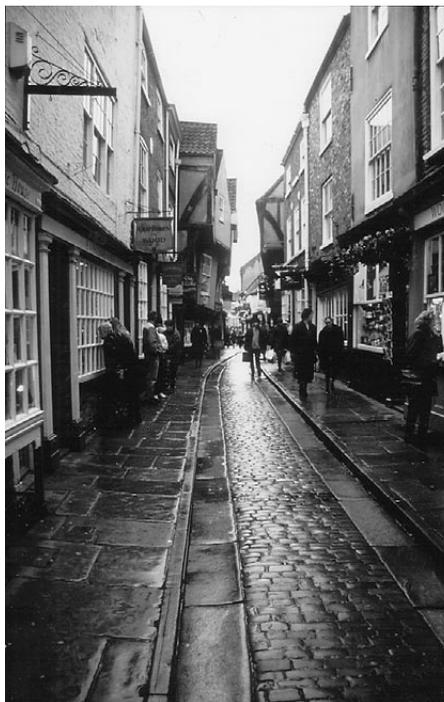
イギリスに先進的な好例

以前、都市型のエコツーリズムのお手本がないものと見て回ったイギリスではたくさんのヒントが見つかった。イギリスでは自然環境や歴史的建造物の保護と利用の活動を展開している「ナショナルトラスト」のほか、各都市ごとの「シビックトラスト」などの市民活動が盛んだ。例えば、市民団体が歴史的価値のある貴族の館を独自の財源を確保して維持管理し、市民のボランティアが「インタープリター」となって解説活動を行っているようなケースが数多くあった。また休憩に立ち寄るパブには観光客も地元の人々も集い、ちよつと一声かけあったり、地元情報を聞き出したりということが気軽に行われている。このように市民活動やパブのような「場」が観光客と市民との仲立ちになって、そのまちの魅力をさらに深めていることがたいへん興味深いものだった。

京都では観光客と一般の市民生活との間にまだ豊かな接点を見ることがない。観光客は「点から点」への移動、そして宿泊や食事、買い物もいわゆる「観光客向け」の店に行く。観光客の受け入れを観光事業者だけに任せず、イギリスの例のように市民団体・グループの活動を仲立ちに市民がボランテ

イアとして積極的に関与していくことで、「都市型エコツーリズム」を創出していくことができ、観光の活性化と「エコ・シティ（環境都市）」、「づくりの両方につなげていくことが可能ではないだろうか。社寺や観光施設だけではなく、「市民」ひと」が観光の前面に出てくることで、いままで奥の方に隠れていた「光」が発掘されてくるのではないかと思う。

一方私たちも京都から一歩出れば「旅人」だ。旅先の環境を大切に、また旅先の環境から学ぶ姿勢「エコ・ツーリストとしての態度と行動を養い、その視点を「京都型エコツーリズム」に生かしていける。また「おこしやす」の気持ちは「ボランティア」の精神そのものである。あまり堅苦しく考えずに、ガイドマップを片手に道を探している観光客や、バス停で困っている観光客がいたら、声をかけてあげるといふことから気軽にスタートしてはいかがだろうか。



調和型のエコツーリズムの手本やヒントが多かったイギリスのヨーク市。(西村仁志氏 撮影)



ヨーク市内にある市民団体のボランティアたち。(撮影 同)

2. まちづくりと環境・観光

エコシティ エコ・ツーリズム エコ・ミュージアム

塚本 珪一（つかもと けいち）

平安女学院大学教授・環境市民代表・

京のアジエンダ21フォーラム

エコツーリズムワーキンググループ運営委員

旅・二十一世紀の町の理想像

エコ・シティ、エコ・ツーリズム、エコミュージアムは「町・旅・二十一世紀の町」の理想像だと考える。

エコ・シティ、それは、人間だけではなくすべての生きとし生きるもの住みよい町、美しい町、公正な町である。もし、京都がエコ・シティであれば、訪れる人は「生命と愛を思いだす」旅ができ、ゆつくりと流れる時間を持つことになる。その旅がエコ・ツーリズムである。

残念ながら京都は今のところエコ・シティではない。高瀬川に沿うあたりもせつかく美しい遊歩道ができてもすぐにバイクや自転車置き場になっているが、このことは公正でなく安全でない町ということだ。公正であるということは表現の自由、差別がない、健康である、人間の尊厳を大切にできるということである。

しかし、京都にはいくつかの世界遺産があるように、美しい自然と文化が共生しているから、京都

まるごと博物館という「人・自然・命の感動空間」づくりを始めたい。それがエコミュージアムで、そこにはコアの中核があってもいいだろう。コアには京都御苑という生き物のための聖域があり、ここでは一年を通じて約百種の野鳥を観察できる。チヨウヒは五〇種、トンボは二四種、セミは八種記録されている。キノコも年間に五〇〇種も見られるという。周囲約四キロの御苑は四季それぞれに美しい花やさまざまな緑、紅葉の世界となる。ここでは年に四回の「自然教室」が開催され多くの人たちの自然学習の場となっている。また、御苑は京都へ修学旅行でやってきた中高生の「エコ・修学旅行」の場であり、環境NGOの人たちの支援によつて新しい視点の旅が始まっている。このNGOでは二十一世紀を前に一般の旅行者のためのエコ・ツアーを考え始めた。京都の町の資源を再発見するために、視点を変えた旅を創造しようとしている。

どうも私たちは京都の文化とか伝統ある人類遺産を自然と切り離して考えてきたが、それは間違いで、一体化したもので、むしろ、共生という言葉が適切だろう。もし、京都を取り巻く里山の緑がなくなったり、高層の建物がいっぱい建てられたら、京都は廃墟のような町となるだろう。

京都トレイル

日本人を含め世界の人々が京都に寄せる想いは何だろうか？

一つは「心の故郷」にある時代の原風景であり、もう一つは「ミステリアスな空間」東洋の神秘性で、共に時間がゆっくり流れるところであろう。しかし、昔のままの景観や生活をいつまでも残しておくことは不可能であり、それも都市の廃墟化である。

東京への遷都時に京都は不死鳥のように甦ったという事実がある。琵琶湖疏水、発電所、市電、博覧会、などなどの文化の発信があった。現代の都市はいかに文化と情報を発信しているかという点で価値が決まってくる。

京都を取り巻く里山には京都の山男たちと行政・企業が協力して「京都トレイル」という歩く道が

完成している。この道は新しく造ったものではなく、執拗に昔から使われ踏まれてきた道を探し、結んだものである。今日ではハイキングやさまざまなウォッチングに多くの人たちに利用されている。

京都盆地にはエコミュージアムの構成要素であるサテライト「衛星」と考えられる緑の拠点とそれらを結ぶ発見の小径「緑道」、生態回廊がある。コアは資料館や博物館のような施設であってほしいし、御苑のような広大な空間であってほしい。サテライトは憩いと癒しの空間であり、時には遊び、学習の空間であってほしい。これらが歩く道で繋がっていることこそがエコミュージアムのすばらしいところである。

例えば、賀茂川と高野川の合流点の糺の森「下賀茂神社の社叢やさらに上流の植物園」半木の森、深泥池なども緑の拠点でサテライトである。糺の森は立体博物館であり時間の推移のなかで生き物たちのあり方を見ることができ仕掛けがあることも知ってほしい。倒れた木は次第に土に還っていくわけであるが、キノコが生え、昆虫が住み着き、バクテリアが見えない世界で働く。この森では、チヨウも五十種ほど記録がある。

京都は古い町、お寺の町というイメージがあるが、それらを支え美しくしてきた自然をもう一度よく見て欲しい。

植物園は昔の半木の森の様相を残し、世界各国の植物を見ることができ、子どもたちや高齢者などあらゆる世代の憩いの場となっている。

地図でよく見ると鴨川を始めとした緑道がいくつああって、緑の拠点であるサテライトを結んでいる。緑道は歩く道であり、生きとし生きているものの生息、採餌、貯食、移動の道である。地球の温暖化という不気味な様相のなかで北上を続けるチヨウたちもこの緑道、川の道を通ってやってきたのだらう。

例えば、かつては南方圏のチヨウであったナガサキアゲハが京都御苑や糺の森、さらには京北町で見られるのも川の道を通ってきたのだらう。



99年9月、鳥根県松江市立第一中学校が京都御苑で「エコ修学旅行」を実施。森の中で植物観察を行った。
(写真提供 環境市民)



深泥池は、1万年以上前の氷河期から湿地帯だった地で、当時からの貴重な種であるミツガシワやジュンサイなどが「深泥池生物群集」として国の天然記念物に指定されている。

「歩く京都」構想

寺社の森など多くの宗教的自然を結ぶ道も車社会のまったただなかにあるためゆるやかな時間の流れのなかで歩くことができなくなっている。いま必要なのは都市中心への車の乗り入れ禁止と路面電車の復活で、その路面電車は軽量であること、風景の中に溶け込んでくれるデザインが必要である。「歩くポストン」があるように「歩く京都」構想こそが二十一世紀京都観光の活性化のテーマである。歩くことは健康の獲得と改善であり、もう一つの思考を甦らせてくれる。歩くためには安全、清潔、情報が必要で、京都の各所に潇洒で楽しいビジターセンターがほしい。ここでは地図や天気図、その季節の生き物情報、旬の食情報、おみやげ情報などの提供があるのが理想である。

2. まちづくりと環境・観光

まちづくりと観光・環境 市民活動・観光事業者・行政のパートナーシップ

水野 篤夫（みずの あつお）

（財）京都ユースホテル協会統括部長・

京のアジエンダ21フォーラム幹事／

エコツーリズムワーキンググループ運営委員

京のアジエンダ21フォーラムでやっていること

環境問題を考えたとき、地球規模の問題に取り組むのには世界的な視野を持った活動をしなければならぬと言われている。しかし、同時に環境問題は私たちの生活の仕方にしかかわるものだから、多くの市民の考え方・行動の仕方が変わらぬと問題解決はできないという面がある。京のアジエンダ21フォーラムは、そうした考えに基づいて、行政、企業や事業者団体、市民活動にかかわる人たちがいっしょに解決策を考え実行に移していくための場として作られた。一九九八年秋に設立されたから多方面にわたって、京都を「環境に対して負担をかけすぎることなく永続していける都市」としていくための活動を始めてきたのだが、その一つに京都の観光をもっとエコロジカルなものにしていく「エコツーリズム都市・京都」作りのワーキンググループの活動がある。

「観光」という分野一つを取り上げても問題は複雑で、関係する人や組織もとても多い。直接・間接に観光産業に関わる人や、ガイド活動などで直接的に観光にかかわる市民、マイナスの意味で「観

光客の車の排気ガスで困っている」「ごみの掃除でたいへん」といった関わりを強いられている人たちも多い。ワーキンググループは、こうした市民個々と観光産業、行政とが互いの利害関係を乗り越えて、環境に対する影響を最小限にしつつ京都の観光が持続されていくようにするには、どうしたらいいのかを考えよう！と努力してきた。宿泊施設や観光関連の産業の「エコロジ化」を進めるにはどうしたらいいか考えるため、実態調査をしたのもその手始めである。また、「エコロジカルなツアー」で実際どんなものだろう？ということを考えていくための「モデルプラン」の検討もしていた。

しかしながら、この活動もいろいろな壁に当たりながら進んでいる。一つには観光産業に関わる人をつまく巻き込めていないということ。厳しい競争と不況の影響にさらされている京都の観光関連の事業者の人たちに「環境への影響を下げるにはこうしてほしい！」と訴えても、やはり「商売につながる」と取り組めない。とはねかえされてしまうことも多いのである。また、フォーラムには行政もメンバーとして加わっている。環境行政に関わる人たちの努力には頭が下がるし、トップも含めて「環境問題への取り組みは行政の柱」という流れもあるが、他のセクションに行く时必须しもそれが高い優先度を持って受け止められていないことも分かる。観光というテーマにおいてもそうだ。「やはり観光活性化が一番で環境はもっと後のこと……」という本音も聞こえる。だから、そこから一歩先へ行くためには、例えば「観光と環境」のように、対立しがちな営みの間の矛盾を乗り越えて連携できるプランを考えることである。フォーラムの役割もそこにある。

市民の活動を観光の中に生かす

京都は歩いて移動するには手頃な大きさの町だ。それに、三方山で元々歩く文化が根付いていて、市民の中でも歩く活動はたくさん行われている。私の所属する京都ユースホステル協会で行なう毎月の歩く行事には、いつも一〇〇人を越える人の参加がある。また、京都を訪れる青年たちとテーマを持って、町中や近くの山を歩く「あるきんぐ京都」というプログラムも行なっている。町家を拠点に



(財)京都ユースホステル協会主催
「あるきんぐ京都」。

伝統的な暮らし方の価値を再発見する活動や、歴史散策の会などフォーラムの活動を通して、エコツアーとは言わないけれどそれと近い内容を持った活動をしているグループが京都にはたくさんあることが分かる。こうした活動は、プログラム自体も魅力的なのだが、観光に訪れる人にとっては参加することで地元の人たちと交流できるという大きな魅力を含んでいる。市民にとっても、自分たちの住んでいる町のことを、よその人に伝えることでその良さや価値を再発見することにつながることもある。もっと、こうした営みが互いに連絡を取り合って、本物に触れる「旅」を京都市民や観光客に提供できるようにできないだろうか？ それにより、通過型の旅から滞在型の旅、見るだけの旅から市民と交流できる体験型の旅という、新たな魅力を提示できるし、それは同時に観光事業としても魅力のあるものともなるだろう。

観光活性化とエコツーリズム ～観光と環境の両立～

「環境への配慮」は観光産業にとってもこれからのキーポイントである。ホテル・旅館のエコロジ―度調査でも、意外なほどに宿泊客の人たちは環境のことを気に留めていることが分かった。「サービスが悪い」という反応を恐れるあまり環境に配慮することに消極的になる必要はなさそうである。フォーラムでは、京都独自の環境管理認証制度「京都・環境マネジメントシステム・スタンダード（KES）」を策定し、事業を開始しているが、観光事業者の中からもそれに強い関心を持っていただいているところも現れている。環境に配慮した観光サービスがこれから「商品価値」を持つのである。京都にとって望ましい観光スタイルは、たとえば電車で京都にやってきて、歩いたり自転車を使ったりゆっくり京都の町をまわり、何日か滞在して市民のツアーに参加したり、町並みを見学したり、伝統工芸にチャレンジしたりと京都の魅力を味わっていくような形である。そこでは、ぜひ環境に配慮した宿泊施設に泊まってもらいたい。そして、結果的には宿泊や食事などで京都でお金を使い、しっかり京都ならではの質の高い土産物を買って、その意味で経済的にも京都に貢献してもらえればいい。

リゾートという言葉があるが、その本来の意味である、「繰り返し訪れること」、「訪れる場」という意味で、京都は上質なリゾートでありたい。ゆっくり滞在し、何度も繰り返し訪れたくなる町としての京都である。数多い京都ガイドなどにそうした環境に配慮した施設や商品、行事を優先的に広報してもいい。そしてそうした京都の良さを知った観光客を増やしていくことができればいいのではないだろうか。

市民が喜びを持って生きていける町

「環境や景観を大切にしたい街に、旅人は繰り返しやってくる」とし、「観光客と市民生活との間に豊かな接点を」持つことが大事である（本書所収の岡田知弘氏、西村仁志氏の論稿より）。それこそがエッセンスの考え方そのものである。外から来るお客さんが市民の生活に喜びをもたらすものであるとともに、市民が観光客を喜んで迎え交流できる仕組みがないと、その関係は観光は長続きしない。観光客が多く訪れるスポットでは、渋滞や混雑、ごみの問題などで市民生活の満足と、観光がぶつかり合う事態が起きている。京都には、観光資源となる過去からの遺産が数限りなくあり、それを見れば訪れるが、いつまでも不便をがまんして人は京都にやってくるのだろうか？ いつまでも市民は我慢できるのだろうか？ こう考えると、観光活性化に今必要なのは、はでなイベントなどではなく、歩きやすいまちづくりなどエゴロジを志向した、観光にも市民生活にも関連する基盤の整備なのではないだろうか？

実は、こうした解決案は簡単に出てくる。問題は、利害を越えていっしょにその解決策の実現に向かう仕組みや流れを作ることなのだが、市民も行政や事業者の人たちといっしょに知恵をひねり、市民の満足が京都を訪れる人の満足にもつながる仕組みの実現に努力する方法「パートナーシップ」が求められているのだ。そしてそれが、私たち市民自身が喜びをもって生きていける町として、京都を維持し続けるために、必要な方向性でもあるのではないだろうか？



「あるきんぐ京都」で市内の豆腐屋を見学。

3. 「修学旅行と「環境学習」
総合的な学習」

京都の「エコ修学旅行」

竹花 由紀子（たけはな ゆきこ）

環境市民 エコツアー研究会・

京のアジエンダ21フォーラム

エコツーリズムワーキンググループ運営委員

「点の旅」と「面の旅」 ～ 新たな修学旅行のあり方 ～

歴史的・文化的遺産に恵まれた京都は、「修学旅行の行き先」として筆頭に挙げられる。毎年春と秋の観光シーズンに、市内の各所で見られる制服姿の集団は、もはや京都の風物詩といってもよいだろう。

私たち「環境市民」は、京都市内に事務局をもつ環境NGOである。その一グループである「エコツアー研究会」では、一九九四年より三カ年に渡って、トヨタ財団の助成を受けて、「京都にやさしい修学旅行プログラム エコツーリズムから修学旅行を考える」という調査研究を行った。かねてから京都のまちへ「観光」がもたらしている環境負荷に注目していた私たちは、「修学旅行」を切り口として、京都の自然や景観に学び、かつ滞在先への環境負荷を低減するようなプログラムの創出をめざして調査研究を開始した。

「修学旅行」は、団体旅行の中でも最大規模のものと言える。平均二泊三日ほどの日程において、

より多くの名所旧跡を巡るためには、大型バスによる「点（観光地）から点への移動」が中心とならざるをえない。そうした趨勢に対し、私たちは、「京都の『面』をゆつくりと味わう旅」を提唱した。たとえ狭い区域であっても、自らの足でゆつくりと歩き、そこに生活する人々と言葉を交わす。そして、そのプロセスにおいて、自ら「京都」を発見する。こうしたプログラムを創り出すため、メンバーが市内各所でフィールドワークを重ねた。

「エコ修学旅行」の二つの要素

） 自然体験 と 景観学習 ）

試行錯誤の末に完成したプログラムは、

- (1) 環境列車エコモーション号で自然体感旅行（鞍馬・貴船）
 - (2) 京都を小鳥の目で見てみよう（大文字山）
 - (3) エコマップをつくらう（市内各所）
 - (4) お寺の森の自然体験教室（市内各所）
 - (5) アーティストの目で京都を見つめる（市内各所）
- の五つである（表参照）。これらのプログラムは大手旅行代理店の協力を得て商品化され、私たちは、一九九四年から現在までにのべ十七校の「エコ修学旅行」の企画・実施を行ってきた。

さて、上記の「京都エコ修学旅行」プログラムは、大別

表 京都エコ修学旅行プログラム一覧（環境市民）

プログラム名	内 容	実施エリア
環境列車 エコモーションで 自然体感旅行	叡山電鉄と環境市民で運営する環境列車「エコモーション号」で、鞍馬・貴船を訪ね、自然観察やゲームによって洛北の豊かな自然に親しみ、また、社寺の拝観や見学を通じ、歴史・文化を学ぶ。	鞍馬・貴船
京都を小鳥の目で 見てみよう	銀閣寺から森の中を歩き、里山の自然を楽しみながら、大文字山の「大」の字まで登る。京都市内を一望しながら、平安京造営以前の京都盆地の姿や都の成り立ちについて、楽しみながら学ぶ。	大文字山・ 哲学の道
エコマップを つくらう	グループごとに暮盤の目と言われる京の道、伝統的な「町家」まちの中の小さな自然などを「発見」しながら歩き、自分たちだけの地図を作り上げるプログラム。全体発表で「それぞれが発見した京都」をふりかえる。	市内各所 (東山・祇園・ 哲学の道・ 三条など)
お寺の森の 自然体験教室	京都の社寺は、街中でも豊かな自然が残る。法然院の森や京都御苑などで自然と親しみ、豊かな自然が京都の文化を育み、その文化が自然を守ってきたことを学ぶ。	京都御苑・ 法然院の森 など
アーティストの 目で京都を 見つめる	画家や写真家になったつもりで京都の社寺や名所を歩き、絵や写真にしたいもの、したくないものをメモしていく。あとでその内容をディスカッションし、景観や町並についての自分の感性や他者の考えを知るプログラムです。自分のまちに戻ったときにも応用できるプログラムです。	市内各所 (東山・祇園・ 哲学の道・ 三条・嵐山 など)

すると、自然体験学習と景観学習の二つの要素に分けられる。(1)や(4)は、京都市内でも自然が豊富に残る洛北エリアや社寺などをフィールドとしており、自然観察やネイチャーゲームといった自然体験を中心としてプログラムが進められる。また、(3)や(5)は、市街地や景観保全地域をフィールドとしており、自然体験というよりむしろ、京のまちに残るエコロジックや景観問題に焦点を当ててプログラムが進められる。(2)の大文字山プログラムは、山中では自然体験、展望台では景観学習を味わえる、複合型のプログラムであると言えるよう。

環境負荷の低減に向けて ― 旅行手段のエコロジック化 ―

「エコ修学旅行」では、旅行目的を「エコロジック」に置くのみならず、旅行手段のエコロジック化をも重視する。例えば、飲料容器のごみを減量するために、参加者には毎回「水筒の持参」をお願いしている。また、上記の五つのプログラムでは、いずれも「歩く」という移動方法が中心となっている。エコ修学旅行当日は、インタープリター（案内人）として環境市民の会員が生徒たちに随行し、環境負荷の低い「徒歩」という手段を活用して周囲の町並や自然をじっくりと観察することを促している。インタープリターや仲間たち、そして、まちに暮らす人々とコミュニケーションしながら京都をゆっくりと味わうことが、これらのプログラムの大きな特長である。

「環境教育」の充実を

「エコ修学旅行」に対する生徒たちの感想は、「まちをゆっくり歩くことによって、普通なら見過ごしてしまいがちなものを発見することができた」といった、「歩きながら発見をする」という方法への新鮮さについて述べられたものが多い。また、インタープリターやまちの人々とのふれあいについて言及されたものも多く見受けられる。私たち大人が旅をするとき、旅先での「人との出会い」が心に深く刻まれるように、子どもたちの心にも、インタープリターやまちの人々との出会いは印象深い

ものとして残るようである。

このように「京都の環境に学び、環境を楽しむ旅」としての京都エコ修学旅行は、ひとまずの成功をおさめている。しかし、「京都の環境に配慮する旅」としては、移動手段のエコロジー化と水筒の持参に「留まっている」という感が拭えない。「エコ修学旅行」での体験が、生徒たちの生活習慣に一石を投じる可能性はあるにせよ、まだまだ「旅行における環境配慮」という考え方は浸透しておらず、旅という非日常の時空間における「特異な体験」に終始してしまっているような気がする。修学旅行での取り組みを日常生活に反映させるためには、学校・家庭・地域における環境教育を充実させていく必要がある。

「エコツーリズム都市・京都」の実現を

ところで、生徒たちの感想の中には、「車が多くて歩きにくかった」「京都の町並が破壊されつつあるのが悲しい」といった、「京都の現状」に対する辛辣な意見も数多く見られる。確かに、京都市街の狭い道には車があふれ、伝統的な景観も無機質な高層建築の中に埋もれつつある。

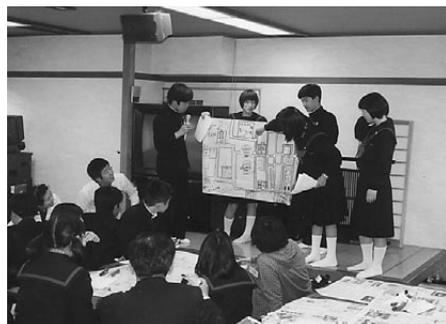
もとより京都は、「山紫水明」と表現される豊かな自然のもと、数々の伝統文化を花開かせたまちである。そして、厳しい気候条件にもかかわらず長きに渡って首都であり続けた背景には、自然との調和を実現したエコロジカルな生活文化があると言える。修学旅行生に限らず、京都を訪れる観光客は、京都ならではの、そして京都にしかない歴史の息づかいを体感するために来訪しているのではないだろうか。現在、京都のまちは、過剰なモーターゼーションや町並破壊によって、「どこにでもある大都市」に変貌しつつある。観光が主要産業の一つであるこの都市にとって、こうした動きは、自らの首を締めるものとして危惧されるべきである。

おわりに

ここ数年、学校における「総合的な学習の時間」導入などを受けて、「京都エコ修学旅行」への注目度は高まりつつある。特に二〇〇〇年春は、五校計六三〇人という大規模な受入を行い、「大型団体旅行」という現実と「エコツーリズム」という理念を統合する難しさを感じた。「移動」や「ごみ排出」という面で環境負荷が大きくなりがちな大型団体旅行に「修学旅行をエコロジカルに変えていくためには、私たちの考えを、「各学校現場における環境教育」と「京都のまちづくり」の双方に対して発信していく必要性を痛感している。「京都エコ修学旅行」は、来訪する側（学校）の「滞在先に生活する人々のくらしに配慮する心」と、来訪される側（京都の市民・事業者・行政）の「来訪者に快い時間を提供しようとする心」が具現化し、調和したときに、真に実現されると言えるだろう。



97年5月、千葉県柏市立土中学校の生徒たちは、大文字山中でゲームを通して自然とふれあった。
(写真提供 環境市民)



00年4月、福岡県宮田町立宮田西中学校の生徒たちは、まちあるきを通じて得た「発見」をもとにエコマップをつくり、みんなで共有した。
(写真提供 同上)

3. 「修学旅行と「環境学習」
総合的な学習」

京都の修学旅行を 総合的な学習で活性化させよう

水口保（みなくち たもつ）

（株式会社教材研究所 企画編集室長）

教育の大きな転換期がやってくる

二〇〇二（平成十四）年度から小中学校で、高校はその翌年度から「総合的な学習の時間」が実施される。今次の学習指導要領の改訂は教育現場にとっては大改革であり、最近マスコミでも賛否それぞれの立場で論ぜられるようになった。

今回の改訂のポイントは、教師が集団としての子どもたちに画一的に知識を伝達するというこれまでの授業のスタイルを改め、一人ひとりの個性を大切にしながら、人類にとって困難な問題に直面するであろう二十一世紀を生き抜く力（生きる力）を育てよう、としているところにある。

「生きる力」とは何だろうか。学習指導要領では「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力」であり、社会のなかで自己を生かしつつ役割を果たす「豊かな人間性」、ことばを換えていえば、「全人的な力」である、としている。非常に「フアジー」な表現だが、それだけに、子どもたちにどんな力をつけさせたいかは各学校で論議するほかないだろう。

「生きる力」をはぐくむ教育

以上のような「生きる力」をはぐくむためにどのような学習をすればよいのだろうか。従来の学習指導要領では、非常に細かく規定されていたのだが、「総合的な学習の時間」には指導要領も教科書も存在しない。

「総合的な学習」を私なりにまとめてみると、

- (1) 既存の教科の枠を超えて
- (2) 国際理解・情報・環境・福祉・健康などの横断的・総合的な課題をはじめ
- (3) 地域の素材や学校の特色を生かし
- (4) 子どもたちの個性から生まれた発想と
- (5) 実際に体験することを大切にす
- (6) 何でも実行可能な学習形態

ということができそうだ。教師の仕事は、それぞれの学校における「生きる力」観を規定し、「子どもたちとともに学ぶ」ことにあるのではないかと私は考えているが、無論、これらのことが現場で可能かどうか、問題はある。「ゆとり」「学校週休二日制」ということで授業時数が削減されるなかで、年間一〇〇時間程度を「総合的な学習の時間」に充てることで、基礎的な学力の低下が危惧されているし、子どもの自主性を尊重するあまり「遊び」の方向に流れはしないか、教師が授業をうまくコントロールできるのか、そもそも何を学ばよいか、等々、多くの疑問が発せられているのは事実だが、私たち一般市民と学校との関わりに関わり限定して考えると、この「総合的な学習の時間」を通して、学校は地域に対してより開放的にならざるを得ず、「地域の人と環境の教育力」が問われるようになってくることは間違いないだろう。

修学旅行は「元祖総合学習」

さて、次に「修学旅行」について考えてみよう。修学旅行は学習指導要領のなかでは「特別活動」の「旅行・集団宿泊的行事」として位置づけられている。そのため団体生活の訓練および親睦に重点がおかれており、教室のなかで学べない「何か」を実際に見聞して体験することができればさらに望ましいというのが、現在の標準的な修学旅行の姿であろう。

ではその「何か」とはなにか。もともと教科は限定されていないので、逆にすべての教科が学習の対象になった。京都での修学旅行を考えてみよう。

たとえば

金閣寺・銀閣寺での足利氏の歴史を知る＝「歴史」

社寺の建造物の様式や仏像を鑑賞する＝「美術」

仁和寺や双ヶ丘で吉田兼好・『徒然草』について学ぶ＝「国語」

京都盆地・鴨川など地形を観察する＝「地理」

など、確かに教科横断的だ。さらに、「総合的な学習」のポイントの一つである「体験学習」についても、清水焼絵付や友禅染などは十年以上前から実施されているし、京都市内の班別自主研修は「生徒の自主性を尊重する」「ことを目的にすっきり定着している。このほか、「環境学習」「海外修学旅行」「ボランティア体験」などもあり、修学旅行と総合的な学習、そしてエコツーリズムとの類似性は非常に強いということができる。

無論、現実的には修学旅行は思い出づくり、と割り切って生徒を楽しませること、そして無事日程を消化することに重点をおいている学校が多いことも事実だが、授業時数が削減されるなかで修学旅行だけに「ゆとり」が許容される可能性も当然少なくなり、修学旅行も「総合的な学習」を軸に大きく変わってくることは想像に難くない。

京都は修学旅行地のメッカと言われつづけてきた。しかし、一九八四年度の一四五万人を頂点に減少しつつ、(二〇二二年は微増しているものの)一九九九年は九八万人となつてきている。少子化による生徒数の自然減を差し引いても、修学旅行の京都離れ傾向は確かにあると言わざるを得ない。一方、京都市全体の年間観光客数約四〇〇〇万人から比べると修学旅行は微々たる数字であるという人もいるが、京都への観光客の多くは中高年層であり、将来にわたるリピーター効果を考えると、修学旅行生を決して軽視してはならないと思う。

「京都・総合的な学習旅行」の提案

私は一昨年、文部省の研究開発校である京都市立御所南小学校の実践事例集『かがやき』（株式会社教材研究所刊）の編集にたずさわつたが、その際、他地区の先生から「京都は素材に恵まれているからうらやましい」という声をよく聞いた。これを逆に考えると、「修学旅行」と「総合的な学習の時間」との結びつきがますます強まってくるのが予想される将来、「京都がもう一度修学旅行のメッカ」として復権できる可能性も高い、ということである。

ただし、そのためには、よりきめ細かい情報の提供、それも「総合的な学習」における学習素材を念頭においた、データベース的発想を強めた情報システムが必要だろうし、環境市民の「エコ修学旅行」に代表される京都のインタープリター・ガイドをもっと増やすことも必要だろう。市民の協力もこれまで以上に必要になることは言うまでもない。生徒たちが一番感動を受けるのは、人と人とのふれあいなのだ。

また、来訪学校の地元での「総合的な学習」と結びつけるための京都における総合的な学習の事例、あるいは具体的なプログラムも必要となつてくるだろう。たとえば、

京都の伝統産業と地方の産業（清水焼と九谷焼、京友禅と加賀友禅など）

COP3と京都議定書、行政・市民の取り組みを地元の取り組みと比較する

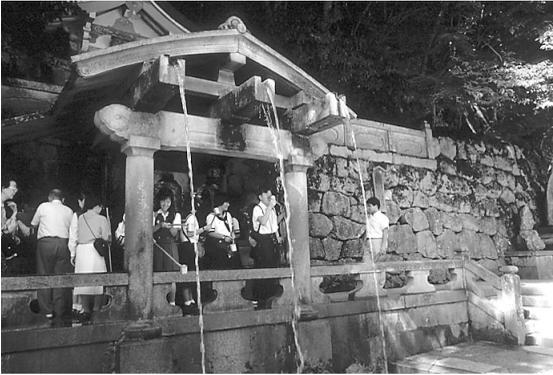
京都人の食生活と近世における物資の流通

町衆の生活の知恵と地元的生活習慣

など、さまざまな京都ならではのプログラムが考えられるはずだ。それも「総合的な学習」の数十時間の単元の一部として活用できるような工夫が求められると思う。

*

多くの修学旅行生が、総合的な学習の一環として京都に來訪してくれると仮定すれば、今度は京都に対する目もよりいっそう厳しくなることも同時に考えておかねばならない。それは、京都の（市民も含めて）エコ度がよりいっそう問われるということだ。景観・ごみ問題などの環境全般にわたり、日本が世界に誇るエコシティとなることが要求されるだろう。そしてそれは市民にとって望ましい方向なのだから、その意味でも「京都・総合的な学習旅行」を応援したいと思う。



清水寺「音羽の滝」。
(写真提供 (株)教材研究所)



修学旅行生でにぎわう産寧坂。
(写真提供 同)

4. 交通とエコツーリズム

都心の交通環境と エコツーリズム

中川 大（なががわ だい）

（京のアジエンダ21フォーラム 幹事・
京都大学大学院工学研究科助教授）

賑わいを生み出す都心の道路空間

ヨーロッパの多くの都市で中心市街地に賑わいが戻ってきている。以前は自動車に占領されていた市街地中心部の道路を、歩行者と公共交通を中心とした空間に改造し、人々が集い、憩い、交流する場を作り出したことが最大の理由である。自動車への危険を感じることなく、排気ガスもない空間に多くの人が集まるようになった。

自動車の発達とともに郊外の商業施設に押されて市街地の中心部に元気がなくなってきたのは日本の多くの都市と同じだが、そのなかで逆に自動車に頼らない空間を作った発想が重要である。多くの市民や観光客が、街の雰囲気を楽しむために市街地中心部を訪れるようになると個々の店の魅力もさらに向上する。街の魅力が賑わいを呼び、賑わいがまた街の魅力を高めるといった良い循環に流れを変えるきっかけとなったのが、道路空間に対する認識の転換であったといえる。

道路が自動車で埋め尽くされていても決して賑やかとは言わないということを考えれば、都心部の

空間を自動車中心の構造から歩行者と公共交通を主役とするものへと改造することが、賑わいと呼び起こすことにつながる事が理解できる。

京都の都心部は魅力の宝庫だが

エコツーリズムが目指す方向は、環境に負荷をかけずに行動し、訪れた街の真の良さを発見することにある。観光地と呼ばれる特定の個所を、観光客だけが分離されて行動するのではなく、まち全体の魅力をそのままの姿で楽しむものである。市民と観光客という分類さえ意味を失うほど、その街の自然や文化に親しみを持つてこそ成立するものである。

そのようなスタイルの行動を考えたとき、京都の都心部は、まさにエコツーリズムを先導するにふさわしい地区であると言える。四条通・河原町通を軸に、祇園から室町・新町あたりにいたる一帯には、京都にしかない多くの魅力が徒歩で散策できる範囲に点在する。

和菓子・和装・京料理をはじめとする老舗をめぐるのも良いし、この地にゆかりの歴史上の人物の足跡を訪ねて回るのも面白い。武将・商人・文化人など枚挙に暇がないほどの人物がこの地を舞台に活躍していたことを思うと興味はつきない。祇園祭に代表される伝統行事やそれにまつわるエピソードなどを捜し求めてまわるのも京都らしい。ここにすべてを書ききれないほど豊富な素材があることを考えると、都心部全体が大きなテーマパークを形成しているとも言えるほどである。

しかし、いま京都を訪れている人々にとってのこの地区の魅力は、その素材の豊かさと比較すると十分に大きいとは言えないのではないだろうか。都心に立ってその空間を眺めてみても魅力的であるとは言いがたい。視界のなかで最も大きな割合を占め、個々の素材を面的につなぐ機能を持っている道路空間が魅力のないものである限り、街全体の魅力を高めることは難しい。

歩行者と公共交通が主役の都心空間に

河原町通や四条通は、道路空間の三分の二以上が自動車のために使われている(図)。ところが、実際にこの道路を通っている人の数を調査した結果、自動車で通過している人の数より歩行者の数の方がはるかに多いことがわかっていて、数の上でも主役であるはずの歩行者を三分の一の空間に押し込んでいることになる。加えてバイクや自転車歩道にたくさん置かれていたためさらに歩きにくく、店のディスプレイを見ながらゆっくりと散策するようなこともできない。人とぶつからないようにただ目的地に向かって歩くだけの歩道になってしまっている。

また、これらの通りに囲まれた街区内の道路でもやはり同様に自動車交通による問題が生じている。地区には用事が無くただ通過するだけの自動車が走り回り、安心して歩くことも難しい。最も京都らしさを残しているはずのこれらの道路でもゆっくり散策することはできない。歩行者が少なくなれば市民や観光客を相手の商売は成立しづらくなり、人の流れを必要としない事務所棟やマンションに変わっていくことになる。

このような状況を考えると、この地区の道路を歩行者と公共交通を最優先にした空間に改変すれば、街の魅力は飛躍的に高まると思われる。河原町通や四条通は歩行者と公共交通のための空間とし、細街路は通過交通を排除して歩行者と地区内に用事のある自動車だけの道にするのが有効な方法であろう。静かで環境にやさしい公共交通機関として路面電車(LRT)を考えることもあり得る。自動車の喧騒と排気ガスから開放された環境のなかで、多くの素晴らしい素材をゆっくりと歩きながら訪れることができるようになれば、個々の素材もより研ぎ澄まされたものとな

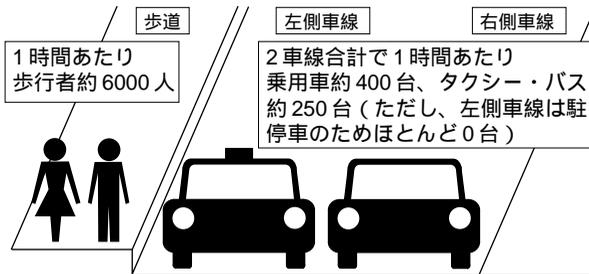


図 都心の交通量の現状
(四条通富小路付近北側、2000年6月の日曜日午後4時から5時)
「京都市都心における交通対策研究会」調査

る。エコツーリズムをテーマとしたテーマパークが都心一帯に広がっていると見えるような街になれば京都全体の魅力もさらに高まるだろう。

二〇〇〇年秋からさまざまな試みがスタート

実は、京都の都心部の交通環境をより豊かなものに改善しようという動きはすでに始まりつつある。都心部をまわる一〇〇円循環バスが二〇〇〇年春から試行運転され、二〇〇一年四月から本格運行されているのもその一つである。バス停間隔を短くし、料金も下げることによって、徒歩を補完し、都心部での回遊を便利にしようというものである。デパートのなかのエスカレーターやエレベータのような役割を持つものと考えればわかりやすい。また、中京区の東地区にあるすべての商店街が買い物客にこの一〇〇円循環バスの乗車券を配布して、応援した。これは公共交通で都心に来訪する人を応援するという新しい動きであり、協力店舗の数などは日本最大規模のものである。都心の交通環境改善に向けての重要な第一歩であると言える。

これに呼応して市をはじめ様々な機関が協力して施策を展開した。例えば、交通局は一〇〇円循環バスの運行本数の増加や運行時間の延長などを試験的に実施し、府警はバス運行の妨げになっている駐停車の取り締まりを強化するといったように、自動車利用から公共交通利用へのシフトを促進するための施策が行われた。

さらに、「歩いて暮らせるまちづくり」という企画も市の呼びかけで始まっている。市民が集まって都心部でのまちづくりを提案して実践するもので、二〇〇〇年十一月には「まちなかを歩く日」が設定された。市民から提案された「祇園囃子の聞こえる町」や、「公開工房」などの企画がさまざまな取り組みが行われた。歩いてゆつくりと散策しながら都心を楽しんでもらうことによって、都心部のまちづくりについても考えていこうというものであり、この企画は二〇〇一年十一月にも継続して行われた。

ここで紹介した試みはいずれも、商店街や一般市民のアクティブな動きに支えられているもので、市民が先導して、行政が後押しをするという大変良い形で第一歩を踏み出している。京のアジエンダ21フォーラムでも「都心のエコ交通プラン」(<http://www.jcaapc.org/maz1f/toshin/>)を提案しており、エコ交通の考え方は多くの人の共感を呼ぶものとなっている。

当面の試みは小さな一歩であるが、都心の道路を環境と安全性に優れた賑わいの空間にすることを多くの人が望んでいるということを確認するためには重要なステップである。大勢の市民や観光客からこの動きに呼応した行動が盛り上がることを期待したい。ぜひ、自動車利用を控えて電車やバスで都心を訪れ、徒歩と一〇〇円循環バスでゆっくりと回りながら、都心交通の将来の姿について考えてみて欲しい。



ドイツ・ダルムシュタット市の中心街。自動車の流入を制限し、安全な歩行空間を生み出したことによって、にぎわいのある都心が実現されている。



週末の四条河原町周辺（四条通）。歩道は大混雑のうえに違法駐輪が多く歩きにくい。車道では、バスが渋滞に巻き込まれ、時間通りの運行ができない状態。

4. 交通とエコツーリズム



景勝地・観光地の交通

藤井 聡（ふじい さとし）

（京都大学大学院工学研究科助教）

京都の魅力と自動車

二十世紀を代表する発明品をいくつか挙げるとするなら、自動車は外せないだろう。自動車を使えば、徒歩よりも自転車よりもバスよりも電車よりも、誰と、いつ、どこに行くかをより自由に決めることができる。自動車による個人の自由の拡大がもたらしたものは、それは詳しく述べるまでもなく、自動車混雑であり大気汚染、地球温暖化の問題である。しかし、今まであまり注目されなかつた重大な問題がもう一つある。自動車がその土地の魅力を侵害し、稀釈化させるといふ深刻な問題である。二〇〇年を越える長い歴史を持つ京都。京都はその歴史の中ではじめて「京都」となった。寺社仏閣や名所旧跡だけでなく歴史に培われた街角のたたずまいの一つ一つが、京都固有のものとなった。この歴史的な固有性こそが、日本、あるいは、世界の人々の憧れを呼び起こす京都の魅力であり、それが多くの観光需要を呼び起こしている。

長い自動車渋滞がある街角に「たたずまい」はあるだろうか？ 自動車が行き交う京都の道路に歴

史性が培われるだろうか？ こう考えるだけでも、自動車京都の魅力を奪い取ることは想像に難くない。もしこの想像が正しいなら、自動車が減れば京都の魅力はより向上し、京都を訪れる人々は増えることになる。しばしば、自動車の抑制は観光客や買い物客の減少を招き、地域の活力の妨げになるのではないかと心配されてきた。しかし、その心配とは全く逆に、自動車の削減は、歴史性の復活を通じて来訪客を増進させ街を活性化させるための切り札になるかも知れないのである。

もちろん、自動車の削減が京都に恩恵を与えるという「筋書き」は、単なる想像であり、京都での自動車抑制がもたらす効果をここで断言的に予言することはできない。しかし、自動車の削減が良い結果を導く可能性が十分にあることを、過去の実例や研究は物語っている。その証拠をいくつか見てみることにしよう。

ヨーロッパとアメリカの街

自動車社会の波は、ヨーロッパの街にもアメリカの街にも押し寄せた。しかし、それぞれの街が歩んだ道は対照的なものであった。

何も無かった土地に二〇〇年程前から街を作り始めたアメリカは、都市が発展する途上で自動車社会が進展した。そのため、街は、自動車の利用を前提として作られることになった。その結果何ができたのか。自動車でしか行けない郊外の大型ショッピングセンターであり、そこで一週間分の買い物週末に済ませるようなライフスタイル（もちろん、都心での買い物は必要最小限に抑えて）である。今や、アメリカの多くの街では、自動車が無くても普通の生活が難しい状態にあり、歩いて済ませるような用事は少なくなってしまった。

一方、ヨーロッパの街々はどうかだったか。例えば、ドイツのミュンヘンの街並みは五〇〇年間変化しなかった。当然ながら、五〇〇年前に自動車を考慮した街づくりがなされている筈もなく、自動車社会の到来は大混雑をもたらした。その問題もほぼ限界に達した一九六〇年代には、その解消のため

(1)道路の拡張か、(2)自動車を規制するか、の選択に迫られた。その時、ミュンヘンは自動車を規制する方針を選んだ。すると、どうなったか。街への観光客、買い物客の減少を懸念する声とは裏腹に、人々が街で過ごす時間が二倍程度に長くなり、訪れる人が増加した。当然、小売店、観光産業の売り上げが増加し、街は活性化された。人々は安全で快適に歩けるようになったことは言うまでもない。同様の現象は、ドイツのフライブルグでも、イタリアのレッジョ・エミリアでも見られた。つまり、自動車の都心への流入を規制することで、街の中をゆつくりと歩きながら楽しむことができ、それが街の魅力の向上につながり、街がより活性化されたのである。

アメリカの街の発展の仕方とヨーロッパの街の発展の仕方を分けたもの。それは、街の歴史である。街並みを数百年保存し続けたヨーロッパは自動車を排除する必要性に駆られたが、自動車に合わせて自由に街を作り替えることができたアメリカにはその必要性がなかった。京都はアメリカ型とヨーロッパ型のいずれを参考にすべきか、もう議論する余地はないだろう。京都はヨーロッパよりも長い歴史を持つ街なのだから。

自動車と歩行者

ヨーロッパの街の事例は、自動車の削減が恩恵をもたらす可能性を示しているが、ヨーロッパで起きたことが京都でも起きるとは限らない。しかし、京都での可能性を考える一つの参考として、次のような分析がある。御池・四条・烏丸・寺町に囲まれる都心部の道路を対象に得られたデータに基づいて、歩行者と自動車との関係をその他の条件を加味して統計分析したところ、「ある通りを通過する車が一〇〇台増えると、その通りに立ち寄る車は少し増えるもの(プラス三・二台)、歩行者は大幅に減少する(マイナス二六・四人)」という数字が浮かび上がった。この数字を逆に読むと、自動車が一〇〇台減れば立ち寄り客は二〇人以上増えることを意味している。この結果は、京都でも、自動車削減が客足増進に繋がる可能性を示唆している。

シミュレーション

京都での自動車規制をもう少し直接的に考えるために、京都市民と京都を訪れる人の一人一人の一日の動きを再現するシミュレーションを行った。最初の分析は、京都都心（寺町・河原町周辺）への自動車を完全に規制するというものであった。この計算では、都心の魅力の向上を一切考慮しなかったため、都心への来訪者は6%減少する結果になった。しかし、都心の魅力の向上を考慮するならば訪者は逆に増える結果になったかも知れない。

この点をさらに考えるために、嵯峨野、嵐山、ならびに京都の都心部で自動車の流入を規制し、パーク&ライド施策（規制地域周辺に駐車場を整備すると共に、駐車場から規制地域へのバス路線を整備するという施策）を導入する状況を想定した。計算では、自動車削減によって地域の魅力が若干向上することを考慮した。もちろん、運転者が駐車場とバスの利用を嫌う傾向も考慮した。得られた結果は、ヨーロッパで起こったことに一致するものだった。すなわち、自動車規制で、自動車で訪れる人は減るものの、訪れる人の総数は増加するというものであった。

「歩く街、京都」を目指して

京都での自動車削減の影響、それは誰にも分らない。しかし、それが京都をより京都らしくさせ、街を活性化し、安全で快適な「歩く街」に変えるのではないかと、ヨーロッパの事例やデータ分析、シミュレーション分析が語りかけている。それらは、行政の政策としての自動車の規制を具体的に考え始めることが必要であることを意味している。しかし、強制的な規制だけが、歩く街を実現化する方法ではない。我々一人一人は、強制されるまでもなく、私的な自由の一部を節制する程度の公共心を少なからず持っている筈である。だとするならば、自動車規制の導入を叫ぶのと同時に（あるいはそれ以上に）、京都のために一人一人が自動車の利用を自主的に控え、もっともっと「歩く」ことを忘



ドイツ・ダルムシュタット市の「トランジットモール」。トランジットモールとは、歩行者と公共交通だけが通れる街路のこと。お年寄りにも子ども連れにも安全で、散策、買い物、オープンカフェや大道芸などでにぎわう。



東山区の石塀小路。京都の都心にはこうした路地（ロージ）が多く見られる。路地は人々の遊びや憩いの場所であり、京都ならではの魅力にあふれる。

れてはならない。一人一人の意識こそが、「歩く街、京都」をつくる本質的な原動力となるのである。

5. 旅館・ホテルのエコ化

旅館・ホテルのエコ化

旅人の視点から

下村 委津子 (しもむら じつこ)

エコパーソンナリティ・

京のアジエンダ21フォーラム

エコツーリズムワーキンググループ運営委員

旅の始まりは日本では熊野詣でや江戸時代に定着した伊勢参り、またヨーロッパでは中世の頃から聖地巡礼と、洋の東西をとわず信仰がその始まりである。日本では江戸時代にはいり各地の庶民から「講」が起り、「道中記」や「名所図絵」がガイドブックとなりこれを頼りに人々は旅を行ったようである。さらにさかのばれば、平安時代の末期、閉塞感が広がり不安がつのるころ、熊野の先達は道案内をはじめとし心のよりどころや平穩を求める人たちのための、今でいうインタープリターのような役割を果たしていたと考えられる。「エコツーリズム」の精神はこのころから存在していたといえるのではないだろうか。

観光客に高まる環境への関心度

旅はハレの日である、日常では味わえない贅沢なひとときを過ごしたいという人もいるだろう。今まで、ただたんに訪問先での資源や環境を消費する行為にかたよりがちだった「旅の贅沢」は、二十世紀には、旅の本質である旅行先の地域文化や暮らし、自然に深くふれることを求める旅に確実に

移行するだろう。

一九九九年十一月に京のアジェンダ21フォーラムエコツーリズムワーキンググループ「エコロジーチエックチーム」が実施した「宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート」調査によると、「エコツーリズムを知っているか」の質問に対して「知っている」「あるいは聞いたことがある」と答えた人を合わせると全体の四五%という高い認知度となった。また、「観光」の分野においても、「環境問題への対策は必要か」との質問に対して、なんらかの環境対策の必要性を感じている人は全体の九三%にも上っている。このことから観光客のエコロジカルな旅行への関心は非常に高いことがわかる(図)。

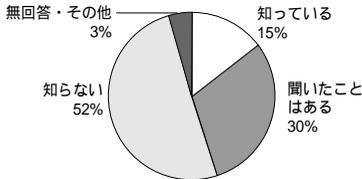
だが、どのようにすればエコロジカルな旅行をすることができるのか、どこにゆけばそのような情報が手にはいるのかなど、行動に移すきっかけを見つけたせいでいる人も少なくないと思う。そこでホテルでの環境保全への取り組みや、エコロジカルな旅行をするための少しの工夫を紹介する。

宿泊施設の環境保全への取り組み

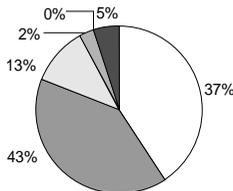
海外の高級リゾートホテルのパンフレットのなかに「できる限り自然環境を破壊しないようつくったホテル」「環境保護を考えた取り組み」といった紹介文をよく見るようになった。それらのホテルに宿泊してみると、使い捨てのアメニティグッズは必要最小限におさえられており、シャンプーなどもおしゃれな陶器のボトルに入っていて、必要な量だけ使うことができるものでごみにもならない。タオルやバスローブは「取

図 「宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート」調査報告書より
(京のアジェンダ21フォーラム, 2000)

「エコツーリズム」を知っているか？



「観光」の分野においても、環境問題への対策は必要か？



- 1. 少々不便でも、積極的な取り組みが必要
- 2. 不便のない程度での積極的な取り組みが必要
- 3. 社会の風潮を考えると、最小限の取り組みは必要
- 4. 観光はある種のぜいたくであり、環境対策は必要ない。
- 5. その他のご意見
- 無回答、その他

り替えてほしい場合はバスタブにおいてください」と案内されており、シーツの交換も希望するシステムになっている。シーツ交換などをリクエストしないと、「地球環境保全へのご協力で感謝します」というサンキューカードや宿泊客へのちよっとしたプレゼントがベッドサイドにおかれる。ホテルの取り組みとさりげない心づかいによりリラククスできると同時に深い満足感を得ることができる。シート交換のリクエスト制はドイツなどヨーロッパの多くのホテルでふつうにみられるシステムだ。日本でもこのような環境への負担を減らす取り組みを行っているホテルも少しずつ増えてきている。ホテル業界で初めて環境の国際規格「ISO14001」を取得したワシントンホテル株式会社（本社・名古屋市）は、ワシントンホテルプラザ十事業所での認証所得をはじめ、環境保全のために直営三十一ホテルで次のようなことに取り組んでいる。

- ・ 客室にも分別型のごみ箱を設置
- ・ 石けんは必要な量だけ取り出せるソープディスプレイを設置
- ・ ロビーや客室の家具の主力材に間伐材を使用
- ・ 水資源を節約する節水コマを設置

また、使い捨てを防ぐため歯ブラシやカミソリなどの常設はしておらず二〇〇〇年十一月二十日から歯ブラシ、カミソリを使った宿泊客から募金を集め、環境事業団の地球環境基金に寄付することも始めている。

これらは宿泊客に直接接する部分での取り組みだが、ほかのホテルでは、宴会が行われている時間帯とその前後およそ一時間だけ、エアコンによる冷暖房を行い、時間外は自動的に電源が落ちる仕組みにしたり、省エネルギーや省資源に取り組んでいるところはでてきている。しかし、宿泊客の理解と協力、ホテル・旅館から宿泊客への呼びかけが必要な取り組みとなると、残念ながらまだ少ないのが現状だ。

これは宿泊施設側が環境保全への取り組みがサービス低下につながると懸念しているためとも考え

られるが、先に記した「宿泊客へのアンケート調査」の結果からは、逆に環境への取り組みは企業としての社会的貢献として真の意味でのサービス提供と受け止められるものと考えられる。

また、環境への配慮を行うことはもちろん、本来に必要なほんもののサービスを、心地よく必要なだけ提供してくれる、そんな旅館やホテルを育てるのは宿泊する私たち自身であるということを忘れてはならない。

エコロジカルな旅行とは？

大自然の中を旅したり、環境保全に取り組んでいる宿泊施設に泊まらないとエコロジカルな旅行はできないのだろうか。決してそうではないはずで、ほんの少しの気持ちの持ちようで誰もがエコロジカルな旅行をすることができる。たとえば、歯ブラシはいつも携帯している人も増えているようだが、石けんやシャンプーは旅先で心からくつろげるように、自分が本当に気にいっているものを持つていてもいいだろう。

旅行先での大きな楽しみのひとつはその土地の料理。地元でとれた新鮮な素材・ほんものの食材を使ったその土地ならではのおいしい料理は、エコロジカルな旅行には欠かせない。しかし、宿泊先の旅館で食べきれないほどの料理がつぎつぎと並びつい残してしまつた経験をもつ人も少なくないだろう。だから是非、食べられない食材をあらかじめ伝えたり、食べられる量だけリクエストすることをおすすめする。必要以上に品数や量を増やしたからといって豪華な食事とは限らないし、なにより食べ残しは大量の生ごみを毎食ごとに発生させているのだ。そんな要望に応えてくれる旅館やホテルはきっとほんもののホスピタリティを持っているところだと思う。

さて、観光地のホテルや旅館には近辺の紹介や案内地図、公共交通機関の時刻などを記したのも置かれている。少々時間はかかっても、自転車や歩いて回れる距離なら自動車は使わずゆっくり見てまわろう。車で排気ガスをまきながら通り過ぎるよりも地図を片手に心ゆくまでゆっくりとした時間

を過ごす方がきつと多くのものや人と出会い、いろいろなことを感じとれるだろう。公共交通機関を使う場合、もしあるならば地下鉄よりも路面電車やバスを利用してみよう。旅人にとつて電車やバスの窓から見えるまちなみや道行く人の風景も立派な観光になる。

そして、その土地で出会った人と少しでも話をし、聞いてほしい。気候風土や歴史について、いつても地理や歴史の教科書にでてくるようなことでなくていいのだ。地域の人たちがその土地で大切に守り、育んできたこと、誇りに思っていること、そんな話を体感し、上質な時を重ねてほしい。きつと残った記念写真はただの美しい風景写真というだけでなく、深い感動とともにあじわい深い旅の思い出としていつまでも心に残り、そしてまた訪ねたくなる地となるだろう。

参考資料

土井 厚著「旅行業界」

グリーンコンシューマー全国ネットワーク著

「グリーンコンシューマーになる買い物ガイド」

ワシントンホテル株式会社

「環境実践ホテル宣言Vol.5」



タイ・プーケットのホテル。「注水には再利用された水を使用」「自然に還元されるせっけん、シャンプーと陶器のディスペンサーを使用」という旨と、シーツやタオルの交換が必要ない場合の指示が書かれている。(下村委津子氏 撮影)



タイ・チェンマイのホテル。シャンプーとコンディショナーは、美しく温もりあるデザインの陶器ボトルに入れられている。(撮影 同上)

5. 旅館・ホテルのエコ化

環境にやさしい宿泊施設へ 宿泊施設の環境問題に関する宿泊客の意識

十倉 真末子（とくら まみこ）

京のアジエンダ21フォーラム

エコツーリズムワーキンググループコーディネーター

「宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート」の実施

宿泊施設は省エネ、省資源、節水など経費節減を目的に環境対策を徐々に進めているが、顧客へのサービスの変更につながらざるような環境対策には消極的だった。顧客がサービスの低下と受け取るのではないかという不安が施設側に大きいからだ。

そこで京のアジエンダ21フォーラムエコツーリズムワーキンググループエコロジックチェックチームでは、一九九九年十一月、京都市内五ヶ所のホテル、旅館にご協力いただき、アンケート用紙を宿泊客にお配りし、約二五〇〇人（回収率五〇・八人％）という大規模な回答を得て、宿泊施設の環境対策に対するイメージを探ってみた。ちなみにアンケートは日本語のみで、回答者はほぼ国内の人々であると推定している。

表1の番号 での質問に対して、「積極的な環境対策が必要である」という回答が九三％を占め、「観光は贅沢であり、環境対策は必要でない」という回答はわずか二％であった。

次に「客室内のサービスが表の番号 から までのように変更になった場合いかがですか」と聞いてみた。いずれの質問も「賛同する」という回答が七〇%以上を占め、「賛同するが抵抗あり」という回答が一五%前後、「賛同しない」という回答は五%程度に留まった。これらの項目はほぼ顧客の支持を得ていると見えよう。しかし、この質問は「賛同する」は五二%に留まり、細かいごみ分別はバックヤードで行う方が良いとの指摘が多かった。

のタオル・シーツ類の交換要望制の導入に賛同し、交換を「希望しない」は三四%、「何か特典があれば希望しない」は二二%。逆に「常に交換を希望する」人も二八%おり態度が分かれた。これらの多様なニーズにきめ細かく対応するためにも同制度の導入は有効であると考え。ただこの制度の顧客への周知の方法に工夫は必要である。

のアメニティーグッズの限定については利用者の要望は厳しかった。「賛同する」は二五%、「要望すれば他のものももらえるのであれば賛同する」が一五%、「他にも置いてほしい」が五〇%を占めた。他にほしいものとして「歯ブラシセット」「ひげそり」「シャワーキャップ」が多かった(図1)。各グッズへの要望度を参考に施設に合った提供内容を再検討しても良いのではないだろうか。

環境への配慮が施設の選択基準になるかを尋ねたのが からの質問で、いずれも「非常に考慮」「少しだけ考慮」を併せると七〇%強と高く、「考慮しない」は一五%前後に留まった。自然素材の食事メニューは「価格が高くて納得する」が六割を越え、平均一七%増までの価格上昇なら納得するという結果が出た。健

表1 アンケート項目の概要

分類	番号	質問項目
全般的な環境意識		エコツーリズムを知っているか
		観光の分野でも環境対策は必要と思うか
客室内のエコロジカルなサービスへの意識		ポンプ式容器の液体石けん
		ポンプ式容器のシャンプー・リンス
		再生紙100%、シングル巻きのトイレトペーパー
		2分別の分別ゴミ袋を室内に設置
		5分別の分別ゴミ袋を室内に設置
		(宿泊客に対して) タオル・シーツ類の交換希望制を導入
	アメニティーグッズの提供を最小限(石けん、シャンプー、リンス)に限定	
食事		食事メニューへの環境配慮は、施設の選択基準になるか
内装材・備品		内装材、備品への環境配慮は、施設の選択基準になるか
施設全体		宿泊施設の総合的な環境配慮は、施設の選択基準になるか

康ブームの中、化学調味料を抑え、地場の食材を使用するなど工夫の余地は大きいと思われる。

一九九八年夏に、全ての日本ホテル協会会員ホテルに郵送形式で調査を行い、一三件の回答を得た施設側における環境対策の取り組み状況の調査（以下「ホテル調査」）がある。それには「客室内の液体石けんの導入はいかがですか」という質問に対して、「既に導入済み、現在準備中、今後検討する」という回答が合わせて六三・八%もあった。現在この数字は急速に高まっていると思われる。石けん、シャンプー、リンスを、ポンプ式あるいはディスプレイ式にすることにより、年間宿泊者総数十二万人のホテルで年間三〇〇万円前後もの経費削減につながるかと私たちは試算している。

また、このホテル調査では、客室内でトイレトペーパーのダブル巻き、シングル巻き採用のホテルはちょうど半分ずつとなっている。ダブル巻きからシングル巻きに変更すると、三五%程度顧客が使用するメートル数が減り、コスト削減に貢献するという結果が出ている。再生紙一〇〇%を客室内も含めて全館で使用しているところは「ホテル調査」では一四%に留まっていたが、手触り感は向上しており、パブリックスペースに限ると現在多くの導入があると推測している。

分別のごみ箱を客室内に設置しているところは、全国的にみるとまれであるが、本アンケートのお客様の自由記述欄において、一つのごみ箱にしか捨てる所がないことに心苦しさを感じているという記述が多数あった。今後検討の余地は大きいと思われる。

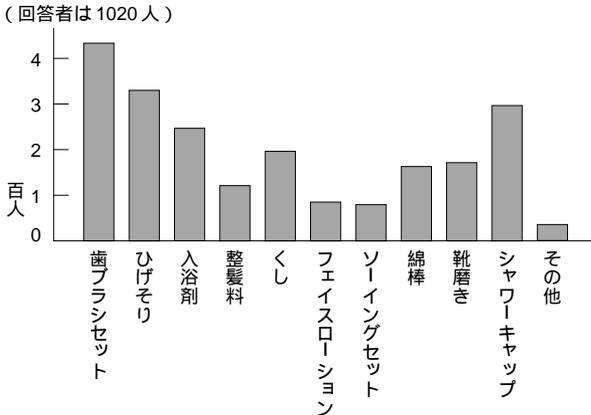


図1 客室内に置いてほしいアメニティグッズ

全体の結果として、私たちの想像以上に宿泊客は環境対策の必要性を強く認識し、宿泊施設の選択基準として考慮する可能性が大きいことが読み取れる。

この種のアンケートは環境に関心のある人が答える傾向があつて、数値が高くなりすぎみなのではないかという声があるが、本アンケートではご協力いただいた方に「京(きょう)のあぶら取り紙」を一つずつお渡しすることを明記し、回収率は約半数の高率であつた。また十一月の観光シーズンでの調査であり、観光目的が七四%と多くを占め、その観光目的の回答者の男女比、男女別の年代構成は、京都市観光調査年報の平成十年に京都市を訪れた観光客総数の男女比、年代構成とほぼ一致している。さらに言えば、もし環境に関心のある人が答える傾向にあるならば、この調査でも明らかになつている環境対策に最も積極的な五十歳代の回答者がもっと増えると思われるが、観光調査年報より少なめである。五十歳代より環境対策に消極的な三十歳代の回答が多かつた。多分「あぶら取り紙」のプレゼントが回答者の大きな誘因となつており、結果として宿泊客全体の意識をかなり公平に捉えていると推測している。

宿泊施設のエコロジー化の意義と地域社会の課題

地球に優しい環境対策は無駄な部分を改善する、顧客の健康を考えると二つの視点から考え、取り組みやすいものから実行していく。同時にその姿勢を顧客にうまくアピールすればコストも少なく、逆に全体の経費削減にもつながる。環境対策は、けちつていゝのではなく、洗練された新しいサービス、「おもてなし」として顧客に受け入れられるということを、この調査結果は強く示している。

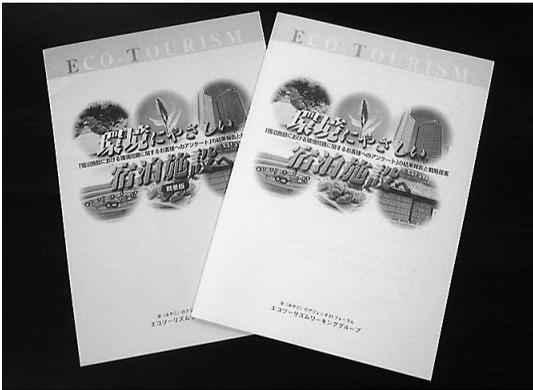
宿泊施設における「環境」という概念は、もともと衛生管理、安全管理などのあらゆる快適な滞在環境にまで広がりを持つものであると私たちは考えている。だから環境にやさしい宿泊施設とは、奥行きと広がりを持った最高のホスピタリティの方向性というものを、二十一世紀に向けて新しく組み立て直した言葉であると捉えていただきたい。

二十一世紀において「環境」はますますクローズアップされ、環境負荷を無視した企業活動は社会的に認められなくなる。環境破壊が進み荒んだ地域に旅人は訪れないだろう。エコツーリズムの考え方が今後ますます台頭し、宿泊施設の経営に環境対策は今後大きな影響を及ぼすに違いない。

しかし環境に優しい宿泊施設を推進するには単独で取り組むには限界があり、質の高い社員教育が長期にわたって必要である難しさも挙げられる。その対応策として私たちは、地域、業界、行政が共に協力し合い「観光と環境」という新しい視点から、豊かな地域社会を作りあげていく仕組みづくりが最も効果的であると主張している。豊かな地域社会に旅人は繰り返し訪れ、喜びを持って滞在するに違いないからだ。その仕組みの中で、環境対策を集客につなげる仕掛けづくりと広報戦略を考えていけばいいと思っている。

宿泊施設はいわば観光の拠点であり、観光客に多くの情報発信ができ、観光という切り口からの地域づくりを住民と観光客に提唱できる大変有利な立場にある。この有利さを宿泊施設はもっと活用し、その地域の観光活性化を担っていけば、自らの宿泊施設の集客に効果的に結びついていくのではないだろうか。

宿泊施設は、今一度、自らの方向性について考え直す時期に来ているのではないだろうか。



「宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート」結果報告集（40ページ）は、京のアジェンダ21フォーラム事務局で頒布している。（フォーラム会員300円 会員外500円）

5. 旅館・ホテルのエコ化

旅館・ホテルのエコ化

大学生の目を通して見えたもの

立命館大学産業社会学部 深井研究室三回生

研究生 / 河越義仁(執筆代表)、宮野陽子、上田麻衣子、大野雅史、小川聡史、角田真一、小泉裕美、駒ゆき香、坂田光永、白綾一樹、新免彩、鈴木道人、高山奈穂、田中真砂世、中川千文、西村謙一、藤田哲史、藤本博基、前田淳子、的場尚子、森川みどり

京都 ここには豊かな自然があり、悠久の時の中で日本人の心ともいうべき文化を育ててきた地である。いつ訪れても新鮮で、四季折々にさまざまな姿を見せ、私たちを楽しませてくれる。この京都の美しさがいつまでも変わらないことを願わずにはいられない。

しかしその願いと裏腹に京都の姿は今、環境の悪化に伴い変わりつつあるように感じられる。四季折々の自然と深く結びついた京都の観光にとって、環境問題は避けては通れない問題であり、環境にやさしい観光産業でなければ、京都の環境「観光資源は死んでしまいかねない。京都の観光を再生させ、二十一世紀にさらなる発展を遂げるために、観光産業ができることは何か。京のアジエンダ21フォーラムの全面協力のもと、私たち立命館大学・深井研究室が「観光産業と環境」という難解なテーマに挑んだのは、このような考えがあったからである。

多角的視点で課題が浮き彫りに

京都における観光産業の中で、経済面でも環境面でも最大の影響力を持つのは宿泊施設である。そ



して施設の最大の環境問題は廃棄物といってよい。私たちはそこに焦点を当て、京都観光の方向性を考察してみた。二〇〇〇年六月から十月までの五ヶ月間、京都市内のホテル、旅館など四八軒の施設に対し、廃棄物処理の現状や処理方法について担当者に聞き取り調査を行った。また排出されたごみなどがどこへ行き、どのように処理されるかを知るため、出入りの廃棄物回収業者、廃食用油等を引き取るリサイクル業者、野菜を納入する業者など各種の施設関連業者三三軒を調査した。さらに関連行政や環境対策に先進的な他府県の施設の調査も行った。この膨大な聞き取り調査の結果から、現状や課題が浮き彫りとなった。

宿泊施設の課題は何か。第一の課題として、宿泊客と施設との間に意識のズレがあることだ。宿泊客は環境対策をサービス向上につなげると捉え、環境意識は総じて高い(注)の注)のに、施設側は宿泊客の意識改革が先だと回答する。この宿泊客との意識のズレが施設の廃棄物対策を消極的にしている。

現在宿泊客の要望は多様化し、量が多ければ良いという「サービス量」の考えは必ずしも成り立たない。例えば歯ブラシや石けんなどのアメニティグッズの削減に関しても、宿泊客に協力を求め、お客様アンケートを行うことでその意識を探り、同時に環境対策への理解を促すことができる。このことが宿泊客一人ひとりの要望に応え、サービスを行うという真の「おもてなし」と考えることができるのではないか。大切なのは、宿泊客を環境対策の協力相手として位置付けることである。

第二の課題として、廃棄物を分別すればするほど費用がかかるという矛盾が挙げられる。本来、廃棄物は分別すればそれだけ再利用品や再生資源になる割合が増え、処理コストは安くなるはずである。しかし今回の調査結果は、まさにこれとは逆であった。なぜなら廃棄物を分別されたおりに回収しようとする回収頻度が増え、その手間を回収業者が負担するか、施設が負担しなければならぬからである。このことから施設が単独で廃棄物対策に取り組むには限界があると思われる。

そこで施設が分別を経費節減につなげるには、効率的な分別回収ルートの確立が急務である。そのために行政の支援のもとに、廃棄物回収業者との協同(廃棄物の種類によって回収業者が役割分担す

(注) 宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート「報告書(二〇〇〇年)京のアジェンダ21フォーラムより

詳しい内容に関しては、報告書「京の岐路 環境にやさしい宿泊施設をめざして」を一〇〇〇円+送料でお送りするので、京のアジェンダ21フォーラム事務局へお申し込みいただきたい。

る、「ごみの量に応じて細かく料金を変化させる等」、さらには近隣の宿泊施設同士の協同関係を築く必要がある。しかし効率的な分別回収ルートが実現したとしても、その先の再資源化が進まなければ、経費削減にはつながりにくい。積極的に再資源化ルートを構築し、さらに宿泊施設がリサイクル商品などを積極的に購入していくことで再資源化を促進すべきである。

しかしここで何よりも強調したいことは、「ごみ自体を減らし」、さらに出さないようにすることである。「ごみを「資源」と捉え、再資源化を行うことは大切であるが、それはあくまでも「最終手段」であって、「最良の手段」ではないことを理解しなければならない。

新鮮さは互いの無知の裏返し

これらの調査結果を踏まえ、二〇〇〇年十二月六日に調査報告会および意見交換会を行った。宿泊施設、廃棄物関連業者、行政、マスコミ、一般市民など様々な立場の方六十数名に参加していただき、廃棄物問題の関心の高さが改めてうかがえた。参加者からは「異業種の方の意見が聞けて良かった」「このような場をもっと定期的に設けてほしい」という意見、一般市民からは「今回初めて宿泊施設が抱える問題を知った」という意見が多く聞かれた。意見交換会がこのように新鮮であったのは、施設側と廃棄物関連業者との情報交換の場が少ないことや、一般市民「宿泊客との意思疎通が十分になされていないこと」の裏返しではないだろうか。これらは私たちの調査結果とも一致する。

京の宿の今後

「環境にやさしい観光」というエコツーリズムの考え方が今広まりつつあるが、これは決して新しいものではなく、誰の心にもあるものを言葉として表したものである。しかし高度成長期の中で「質よりも量」と捉えられるようになり、その心は忘れ去られ、施設側も旅行者も環境を汚していることに気が付かないでいた。地球環境の急速な悪化とともにその反省が生まれ、いま再び「環境にや

「やさしい観光」というエコツーリズムの考え方が大切にされはじめている。京都の美しい自然を守るためにも、いまエコツーリズムを推進する土壌を作らなければならない。その土壌とは宿泊施設を含めた観光産業さらには地域住民の意識改革のことである。観光客の意識の向上も大切ではあるが、それにはまず受け皿である宿泊施設、観光産業、地域住民が変わらなければならない。

私たちは調査を通して、「環境対策はマイナス」という根強い考えが、まだまだ施設に強いことを感じた。施設にとって環境対策は経営上の一つの問題であるが、環境対策に取り組むことによってむだを知り、経費節減を含めた経営効率の向上が可能となる。環境対策が経営的にもプラスになることを改めて認識していただきたいと思う。

京都の観光産業は今まさに岐路に立っている。二十世紀のような大量消費・大量廃棄のやり方を続け、増え続けるごみでこの美しい京都を埋め尽くすのか、それとも将来を見据えて環境対策に取り組み、持続可能な都市の発展、観光産業の発展へとつなげていくのか、進むべき道は自ずと明らかである。

宿泊施設、廃棄物関連業者、行政、地域住民それぞれが同じ壁を越えようとする時、個々に解決策を立てるには無理がある。だからこそお互いの実情を理解し合い、それを踏まえた上で解決策を立てていかなければ、この廃棄物を含めた広い環境問題の根本的な解決には至らない。もちろん宿泊客も協力を惜しんでほならない。

この協同こそが京都の観光資源を守り、二十一世紀を通じて京都が、世界から多くの人々を惹きつける源となるに違いない。

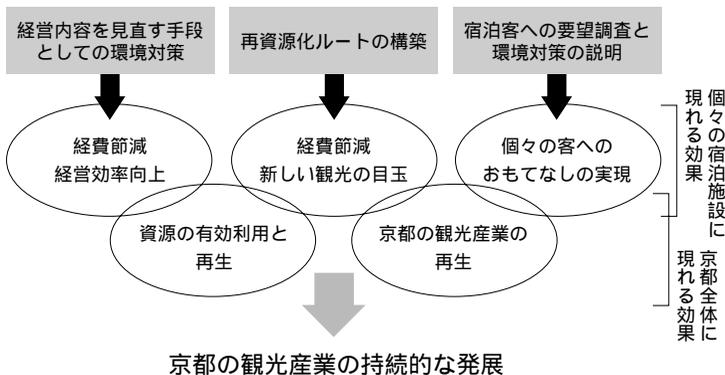


図 「京の岐路～環境にやさしい宿泊施設をめざして～」
 (立命館大学産業社会学部 深井研究室3回生, 2000年)より

5. 旅館・ホテルのエコ化

旅館・ホテルのエコ化 事業者側から

宇多野ユースホステルでの取り組み

高田 光治（たかだ みつはる）

宇多野ユースホステル所長・

京のアジエンダ21フォーラム

エコツーリズムワーキンググループ運営委員

宿泊施設の状態

地球規模の環境問題が深刻化する中、環境対策への取り組みは、京都の重要な産業の一つである観光分野においても例外ではない。

しかし、今日の観光産業の中で最も経済規模の大きい宿泊施設における環境対策は、宿泊者や施設に、節約や、我慢を強いるマイナスイメージと施設のサービスの低下と捉えられがちで、「お客様の意識がわからないと宿泊客の減少につながるのでは」、「取り組みのための労力や費用負担が大きい」といった心配などが先行し、一般企業に比べ大きく対応が遅れている。また、バブル崩壊後の経済回復の遅れや海外の観光地や施設間との競争の激化、観光の多様化への対応など経営環境の厳しさや横並び意識が、「環境対策は新しいサービスであり、ビジネスチャンス」、「環境負荷が少なく、観光資源を傷つけない持続可能な観光であるエコツーリズムは新しい旅の創造」、「環境対策に取り組むことは、観光客が京都に求めている京都らしさの根源である文化遺産や観光資源を保護することになる」

といったプラス志向として捉え、他とは異なる取り組みを進めることを難しくしている。

宿泊者の意識の変化

一九九九年、京のアジエンダ21フォーラムのエコツアーリズムワーキンググループが行った宿泊施設の環境対策に対する宿泊客の意識調査では、回答者の七五%が観光を滞在目的にし、九〇%が「観光」の分野での環境対策が必要と回答している。こうした回答結果に見られる意識と実際の行動には、まだズレが存在するであろうが、環境への取り組みに対する宿泊者（その多くが観光客）の意識の高さは、宿泊施設側の想像を越えるものであった。

こうしたデータは、海外のユースホステルの調査でも裏付けられている。一九九五年のアメリカユースホステル協会の調査では、環境対策に積極的に取り組んでいるユースホステルを利用した滞在者の満足度が、一・一五ポイントに対して、そうではないユースホステルにおいては、一・〇五ポイントという評価結果が得られている。（このポイントは、大変満足一点、満足一点、普通〇点、不満マイナス一点、大変不満マイナス二点として集計したもの）

また、ユースホステルの会員になった理由の項目では、一二%の者が、「ユースホステルが環境を意識した活動を行っているところであるから」と回答している。

こうしたデータからは、環境意識の高い宿泊客は、宿泊施設を選ぶ際に環境への取り組みを考慮することが読み取れる。

また、日本のユースホステルのデータでは、国内のユースホステルに宿泊する日本人の数と海外のユースホステルに宿泊する日本人の数が等しくなってきたており、こうした海外旅行体験者の増加は、物価や宿泊料、施設の充実、サービスの比較だけでなく、環境対策を含めた施設の取り組みや京都観光の質を問う旅行者の増加を予感させる。

宇多野ユースホステルでの取り組み

宇多野ユースホステルでは、環境意識の高いドイツユースホステル協会との交流や一九九二年の国際ユースホステル連盟（IYHF）環境憲章採択の経過等を通して、ユースホステルが環境保全の分野において今まで以上に活動的な役割や取り組みを行うことは、旅行者の新しい期待にこたえるだけでなく、宿泊施設としてのユースホステルの価値を高めることに注目し、環境憲章にうたわれた以下の七項目に沿った取り組みを、試行錯誤しながら進めている。

- 一、消費/節水ゴマの取り付けや節水シャワーへの交換
- 二、リサイクリング/再生紙や再生トイレットペーパー、ペットボトル再生カーペットの利用、ごみの分別とリサイクル
- 三、環境汚染/合成洗剤やシャンプーの石けん製品への切替、一部生ごみの堆肥化、使用済み乾電池や廃油の回収
- 四、省エネルギー/省電力機器の利用とボイラー配管の断熱処理、ソーラーパネルの街路灯の導入
- 五、交通機関/公共交通機関や自転車、徒歩での観光の奨励、車を置いての観光への対応など
- 六、自然/除草剤等を使わない庭の手入れやビオトープ作り
- 七、環境教育/環境セミナーの開催やアースボードの設置（世界中の旅行者が環境問題や取り組み解決に向けたコメントや意見を掲示できるコミュニケーションボード）、ユースホステルでの環境への取り組みの掲示、町歩きツアーの開催、エコロジーフェスタやリサイクルマーケットの開催、環境プロジェクトや取り組みのためのボランティア育成

こうした取り組みのはじめには、費用や効果、手間といった問題の他に、取り組む側の意識を変えることの難しさという問題に必ずぶつかる。例えば、施設や設備には、費用と効果が問題になり、こ

みの分別や石けん製品の導入では、施設スタッフや宿泊者の理解と協力が不可欠である。頭ではわかっていても面倒という場合が多い。習慣化されるまで根気のいる取り組みではある。しかし、継続され習慣化されるにしたがって抵抗感は少なくなる。また、こうした取り組みを通して得られる多くの宿泊者の支持が、スタッフのモチベーションを高め、厳しい指摘が取り組みの質を高めてくれる。そうした意味で、環境への取り組みを宣言することは、冒険的な要素もはらんでいるが、達成への近道ではないだろうか。

環境を切り口にした観光振興への取り組み

多くの宿泊施設では、競争の激化や利用の伸び悩みの中で「経費削減には取り組めても手間やコストのかかる環境対策は難しい」と感じている経営者も多い。しかし、「どうしても欲しい物」が少ない「物余りの時代」を迎えて、京都観光のあり方も変化が求められているのではないだろうか。京都の貴重な観光資源を消費するマスツーリズムから、環境への負荷が少ない持続可能なエコツーリズムへの転換は、京都観光の多様性を育て、新しい顧客と施設の付加価値を生み出すチャンスではないだろうか。

例えば、京都のハイテク企業や大学の研究機関、宿泊施設等が協同で既存の宿泊施設のエコ化を進める改修モデルプランを作成し、そうしたプランを参考に市内の各宿泊施設が工夫してエコ化対応の寢室を二三部屋準備する。そして、それぞれのアイデアと工夫を競う「京都エコツーリズムフェスティバル」といったものが開催できれば面白いし、話題にもなる。おまけに宿泊者に支持される環境対応型宿泊施設のモデルが見つかるかもしれない。こんなふうに考えると、取り組みも楽しいものである。

二〇〇二年四月に、「環境にやさしい」基準の一つとなる京都・環境マネジメントシステム・スタンダード（KES）認証制度がスタートした。

規模や経済的負担等から「ISO14001」の取得が難しい中小規模の事業所や宿泊施設にとって、自らの取り組みをアピールできる取得しやすい認証制度である。
まずは気軽に考え観光のエコ化に取り組んでみることで、利用を伸ばせる宿泊施設も少なくないのではないだろうか。



宇多野ユースホステルの「エコロジーフェスタ」フリーマーケットや手づくりアートのワークショップなどが開催された。



表 京都・環境マネジメントシステム・スタンダード (KES) 認証制度のしくみ

適用規格	KES (STEP1)	KES (STEP2)	ISO14001 (参考)
環境活動取組段階	初級	中級	上級
環境活動取組の目的	環境管理活動の輪を広げる	将来 ISO14001 認証取得を目指す	即 ISO14001 認証取得にチャレンジ
構成項目	環境宣言 環境影響評価 環境改善目標 環境改善計画 (実行) 最高責任者による評価	環境宣言 環境影響評価 計画 (環境改善目標) 実行 確認と修正 (自己評価) 最高責任者による評価	環境宣言 環境影響評価 計画 (目的・目標) 実施及び運用 点検・是正 (内部監査) 経営層による見直し
環境影響評価の事例	チェックリスト等 簡易評価法	チェックリスト・評価点 算定法	規格要求ロジック
マネジメントマニュアル	表形式	簡易マニュアル作成	規格要求マニュアル
支援体制	・コンサルタント ・認証審査	・コンサルタント ・認証審査	・コンサルタント

支援体制：京のアジェンダ21フォーラム KES 認証事業部による。

6. 総論

21世紀の京都を開く エコツーリズム

宗田 好史 (むねた よしひみ)

(京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科 助教授)

観光活性化のためのエコツーリズムを連載して早一年、様々な角度から京都のエコツーリズムを語ってきた。この新しい「自然環境を大切にしたい観光」の形がいろいろ見えてきた。北海道や沖縄の珍しい自然、農産漁村の豊かな自然環境だけでなく、大都市京都がエコツーリズムの拠点として、十分に観光客を惹きつける魅力に溢れていることが様々に語られた。今や「京のアジェンダ21フォーラム」を中心にしてこの町をエコロジカルに変える取り組みも着々と進み、環境NGO「環境市民」の「エコ修学旅行」も始まっている。交通問題への関心も高まり、先進的なホテルや旅館は観光客の意識を支えられたのエコ化を進めている。

二〇〇一年一月に発表された「京都市新基本計画」にも、二十一世紀の京都を牽引する元気で魅力ある観光創りが唱えられ、「歩いて楽しむまちなか観光」と並んで「環境や自然を大切に作るエコツーリズム、グリーンツーリズム」、自然景観や有形無形の文化財、伝統行事を誇る京の界わいを活かすための推進体制が整えられつつある。今やエコツーリズムは京都観光の付加価値として十分に認識されている。こうして京都発のエコツーリズムが形になってきた。

京都発のエコロジー

実は、京都のエコツーリズムは単なるトレンドではない。日本には外来の科学であり、思想でもあるエコロジーだけでなく、独自の自然観、日本人の暮らしに根ざしたエコロジーがあるだろう。京都の数多くの遺産から自然を除くことは不可能である。建造物や古美術品だけでなく、京都には文化財に指定された名勝が多い。日本の芸術上または鑑賞上の価値の高い庭園・橋梁・峡谷・山々、『京都名所図会』に綴られた人文的名勝の宝庫なのである。

神仏の教えを通じ、また伝統文化・芸術、そして文学の歴史が三山と鴨川・桂川に挟まれた京都の豊かな自然を愛で、この土地を数々の歌や物語に読みこんできた。

『洛中洛外図』を見ても至るところに自然の姿が描かれている。家々の中に自然があり、また自然の中に建物がある。庭園は借景によって壮大な風景を取り込むことにより、風景とその生態系を凝縮する。また街なかの坪庭に、路地裏の盆栽に、生態系を向き合つ暮らしの文化が根付いている。田舎との交流では田園と森林の調和した景観を育んでもきた。こうした人文的な自然を文化とした京都は自然を愛でる高い能力ゆえに、日本の四季を司っているといっても過言ではない。新幹線の車中の「そうだ京都へいこう」の小さなポスターに凝縮された自然に、忙しいビジネスマンも四季の移ろいを感じている。

長い歴史の中で、自然と向き合い、自然を護り、京都は自らのエコロジー思想を育んできた。自然を愛でた歴史が庭園や名勝ばかりか、風致地区、歴史的風土保存地区、美観地区など日本の全自治体の範となる景観条例を定め、この京都を護ってきた。日本人のエコロジー精神が集積した場所、自然への思いの積層の中に、日本のエコロジーの源流があるといっても過言ではないだろう。

もちろん反省すべき点も多い。山々を削り、ごみを埋め立て、盆地の環境に不可欠な水と緑をおろそかにしてきた。京都を訪れる人々は、この京都の喪失を一樣に嘆き、片隅に残る小さな自然を見る

時にこそ京都を感じるという。社寺が護りぬいてくれた自然に四季の移ろいを楽しみ、心の中の失われていた日本を求めて旅人が訪れる。

京都を訪れる人には中年以上のリピーターが、また女性も多い。常に京都らしさの再発見を求める人が多いという。そして、京都に子供の頃、父母が教えてくれた日本人の心に出会い安心するという。暮らしの中で祖父母が愛した小さな自然の価値の原型を見出しながら、自分自身の記憶と出会う旅を求めている。心の中の日本人を確認するためにリピーターするお客様に、京都のおもてなしの心をもって「おこしやす、エコロジィと出会う京都に」といえる京都を護らなければならない。そう、日本の古都京都は、もともとエコロジィのメッカなのである。

京都をエコツーリズムのメッカに

エコロジィのメッカ京都には、旅の先達がいる。元気な環境NGOが、全国の仲間や修学旅行生に体験型エコツーリズムを用意し、京都観光アカデミーエコツーリズム部会も周辺の拠点を紹介している。そして、京都にはこの道の様々な導師がいる。名勝庭園の数々に加え、近年では環境教育でも有名な法然院など宗教の世界から、そしてまた奥深い伝統文化の世界からエコロジィを説く人々が集まっている。草木との対話から自然の美を創る華の世界、四季の移ろいに一期一会を味わう茶の道、そして石や木々に壮大な自然の摂理と天の時、人の道を教える禅。京都の誇る伝統文化は、我々がエコロジィを語るはるか以前から人々にエコロジィを説いてきた。この地の利が、すでに京都をエコツーリズムのメッカにしている。これら先達の取り組みと導師の奥深い知恵と力が結集して、京都のエコロジィ文化を発信するキャンペーンが観光活性化のためのエコツーリズムの企画である。

旅人が求めるものと現在の京都の姿との違いに、京都人は悩みつづけてきた。まちづくりの現実は厳しいが、今や京都人の志向は安っぽいビルやコンクリートの塊ではなく、環境を重視する方向に変わっている。エコツーリズムは、この長年の矛盾を解決し、日本人みんなが求める京都を、京都人が

つくっていく時代を開く鍵になるだろう。しかし、そのためには一人一人の小さな声を結集して京都のまちづくりを変えなければならない。この町で進められている孤立した取り組みを結び合い、エコロジカルなまちづくりに活かす連帯が必要である。導師たちの長年の努力に重ね、先達たちの取り組みを踏まえ、環境NGOや京のアジエンダ21フォーラムを中心に観光団体にだけない広い市民の参加がエコツーリズムのメッカを創っていく。今年度も数々の交通社会実験や京滋地球環境カレッジなど次々と新しい企画が京都のエコ化を進めてはいる。しかし残された時間は少ない。町家を護る取り組みも厳しい局面を迎えている。「おこしやす、エコロジィと出会う京都に」といえる町をつくる努力はすぐにも始められなければならない。

自然を愛でる力に憧れ京都を訪れる人々はみな心の奥底にエコロジィの源流を秘めているかもしれない。そうエコロジィは新しい教えであるだけでなく、自らの心に宿るものである。京都にきて、自分自身を再発見し、自分の中のエコロジィを再発見する旅を企画したい。

バベルの塔ならぬバベルの塔が倒れた十年間とともに、豊かさを追い求め人々を孤独にした二十世紀を京都人は送り出し、人々が結び合うことを求めて生きる二十一世紀が始まった。京都への旅は、孤独な日本人が自然とむすびあい、人と出会う機会を提供する。エコロジカルに生きること、物欲の世界から自らを解き放つ旅、孤独な心を癒す旅、そんな京都観光が、全国の京都ファンに求められている。京都が総合力を發揮する時、観光を通じた「京都発エコロジィのおこしやす」が発信される。

地球環境を考えるエコロジィの原点は、人間の諸活動と自然環境との接点をみすえ、身近なところで自然との接し方考えるところから始まる。その意味で、先人達がいかに自然を愛でてきたか、またその摂理と人生とを重ねつつ、世の移り変わりを眺めてきたかを考える京都への旅に、見出すものは多いはずである。

また桜の季節が巡ってきた。京都の至るところに桜が咲き、観光客があふれる季節である。全国ど



ここでもある桜をはるばると京都に観にくる人々は多い。各地の桜とはどこか一味違う京都の桜。この違いを愛でる人々は、この桜に京都の文化的アイデンティティを見出している。この違いは単に文学的な意味ではないだろう。日本人の美意識の根底を形成する自然との調和に、日本人の心が失うべきではないエコロジー源流を見出そうとしているからである。



京のアジェンダ21フォーラム エコツーリズムワーキンググループ

2 パートナーシップで築く 京都のエコツーリズム

取り組み紹介と提案

パートナーシップで築く 京都のエコリズム

京のアジエンダ21フォーラム
エコリズムワーキンググループ

京のアジエンダ21フォーラム エコリズムワーキンググループとは

一九九七年に策定された京都市の「京のアジエンダ21」（環境と共生する持続型社会への行動計画）に、行動目標の一つとして、「エコリズム（環境調和型観光）都市づくり」が示されました。そして一九九九年に、関心をもつ市民や団体、観光事業者、学識者、行政などが参画し、「京のアジエンダ21フォーラム エコリズムワーキンググループ」が活動を開始しました。

「観光シーズンの交通渋滞やごみ公害に疑問を感じる」「ホテルや旅館の使い捨てグッズをもったいないと感じる」「京都の魅力や、徒歩や自転車で満喫するようなプランを考えたい」「自分の研究や事業に結びつけながら、まちづくりに貢献したい」等々、メンバーの参加の動機はさまざまでしたが、立場の違いをこえて話し合い、それぞれの立場を生かした活動を活発に展開することができたと自負しています。

以下に、当ワーキンググループのこれまでの取組をご紹介します。そして、住む人にとっても訪れ

る人にとっても快適で魅力ある「エコツーリズム都市・京都」の実現に向けて、京都市のあらゆる市民の皆さん、観光事業者の皆さん、そして行政部に意見提案をしたいと思います。

エコツーリズムワーキンググループの取組

一九九九年四月に第一回の会合が開かれてから、月一回のペースで開かれる運営会議を核にしながら、さまざまなプロジェクトが動いてきました。

まずは、「京都におけるエコツーリズム」とは何かを考えるために、二〇〇〇年二月十日に「エコツーリズム都市・京都シンポジウム」を開催し、多くの方々と情報を共有し反響を呼びました。そして、このシンポジウムの主旨に共鳴してくださった京都新聞社のご好意で、同年四月から一年間に渡って、この冊子にまとめられている論稿の新聞掲載が実現しました。また、同年六月から、六回にわたってエコツーリズムセミナーを開催し、さらに多くの方々と、京都でのエコツーリズムの方向性を探りました。

宿泊施設のエコ化にも、「観光施設エコ化プロジェクト」と称して積極的に取り組みました。一九九九年度には「宿泊施設における環境問題に関するお客様へのアンケート」を大規模に実施し、宿泊施設の環境配慮について宿泊客が強く支持しているという結果を得ました。それを受けて、二〇〇〇年には、立命館大学産業社会学部深井ゼミと連携しながら、宿泊施設の最大の環境問題である廃棄物問題について詳細に調査を行い問題点について明らかにしました。さらに、二〇〇一年度には、滋賀県立大学の仁賀氏と協働し、宿泊施設の環境対策の実態調査を行いました。その調査の結果を受けて、二〇〇二年度実施予定のグリーン購入ネットワーク「ホテル・宿泊施設」選択（利用）ガイドラインの策定にさまざまな提案を行っています。宿泊施設の総合的な環境マネジメントの推進についても「京都・マネジメントシステム・スタンダード（KES）」の宿泊施設版の検討を通じて検討しています。二〇〇一年三月からは、自転車観光を京都で推進するため、フォーラムのパイロット事業として、



2000年2月10日に開催された「エコツーリズム都市・京都シンポジウム」(於 ウィングス京都)。200人以上の参加者が集まり、多くの出会いと交流が生まれた。

京のアジェンダ21フォーラム エコツーリズムワーキンググループの活動

<セミナー、シンポジウム>

- ・1999年11月18日 講座「エコツーリズムって何だっけ？」講師：西村 仁志さん（環境共育事務所カラーズ）
- ・2000年2月10日 エコツーリズム都市・京都シンポジウム（於 ウイングス京都）
基調講演「これからのエコツーリズム都市・京都」講師：岡田 知弘さん（京都大学経済学部教授）
分科会1「まちづくりと観光・環境」
情報提供：塚本 圭一さん（北海学園北見大学産業観光学部教授、環境市民理事）
分科会2「交通問題」情報提供：藤井 聡さん（京都大学大学院工学研究科助手）
分科会3「修学旅行を考える」
情報提供：藤淵 明宏さん（福岡県宮田西中学校校長）、水口 保さん（(株)教材研究所）
分科会4「旅館・ホテルのエコ化」
情報提供：角新 史朗さん（京のアジェンダ21フォーラム）
柴原 陽子さん（ヒルトン大阪人事部トレーニングコーディネーター）
向井 征二さん（オービス環境マネジメント研究所所長）
- ・2000年6月16日：第1回エコツーリズム月例セミナー「21世紀の観光戦略～エコツーリズムをめざして～」
講師：塚本 圭一さん（平安女学院大学教授）
- ・2000年7月18日：第2回エコツーリズム月例セミナー「京都エコツーリズムの可能性～持続可能な観光に向けて～」
講師：杵本 育生さん（環境市民 事務局チーフコーディネーター）
- ・2000年8月28日第3回エコツーリズム月例セミナー
「21世紀の観光戦略（2）～京都府とエコツーリズム～」講師：宗田 好史さん（京都府立大学助教授）
- ・2000年9月29日：第4回エコツーリズム月例セミナー
「インタープリテーション～わかりやすく伝える～」講師：西村 仁志さん（環境共育事務所カラーズ主宰）
- ・2000年11月22日：第5回エコツーリズム月例セミナー「マストツーリズムとエコツーリズム」
講師：石崎 祥之さん（立命館大学経営学部助教授）
- ・2001年2月1日：第6回エコツーリズム月例セミナー「京都エコ修学旅行と『総合的な学習の時間』」
講師：竹花 由紀子さん（環境市民エコツアー研究会）

<エコツアー企画>

- ・1999年11月11日 エコマップをつくろう（於 中京区 元梅屋小学校周辺）
- ・2000年2月11日 京の町家をたずねて（於 中京区 吉田邸）
- ・2001年6月24日 自然100選あじわいエコツアー～森との出会い、森での出会い～」（於 法然院の森）
（財）京都市ユースサービス協会 京都市北青少年活動センターと共催

<調査研究>

- ・1999年度 宿泊施設の環境問題に関するお客様へのアンケート調査
（京都大学大学院工学研究科 角新 支朗さんと協働）
- ・2000年度 京都市内の宿泊施設の廃棄物調査（立命館大学産業社会学部 深井研究室3回生と協働）
- ・2001年度 京都エコツアープログラム実施団体へのアンケート調査
（立命館大学理工学部4回生 森井 健策さんと協働）
- ・京都市内の宿泊施設の環境対策への取組に関するアンケート調査
（滋賀県立大学環境科学部4回生 仁賀 崇之さんと協働）

<その他>

- ・2000年4月～2001年3月 京都新聞朝刊に『『おこしやす』を考えよう！ 観光活性化のためのエコツーリズム』を計12回連載

1 講師の役職は、セミナー等開催時のものです。

2 会場が特に明記されていないものは、京のアジェンダ21フォーラム会議室で開催しました。

宿泊施設向けに観光レンタサイクルの検討を進め、一つの企業により、事業として実施しています。宿泊施設のエコ化と並行して、京都の魅力的なエコツアープログラムを掘り起こす「京都エコツアープログラム実践交流プロジェクト」にも力を入れています。このプロジェクトでは、京都で実施されているさまざまなエコツアー（京都の自然風土、歴史文化、生活文化などをじっくり味わうことのできる旅）を実施している団体のネットワークキングを進めるため、立命館大学の森井氏と連携して、エコツアープログラムのアンケート調査を実施、それらの実施団体の交流を深めるための取り組みを計画しています。

二〇〇一年から二〇一〇年の間の京都市が取り組む政策を提示した「京都市基本計画」において、「環境」があらゆる政策の基本とされ、「京のアジェンダ21フォーラム」を核にした環境問題への取り組みが大きく掲げられています。その中で、環境を大切にした旅（エコツーリズム）が全体を通じて随所に記述され、私達の活動がそのまま反映されています。

ミーティングやプロジェクトごとの活動には、いつでもどなたでも参加可能であり、行政、事業者、関心ある市民の皆さんが広く集まり、それぞれの時間を分かち合い、得意分野を生かし合い、合意形成を図る中で京都におけるエコツーリズムを推進しようとしています。

エコツーリズム都市・京都の実現に向けての施策

↳ 京のアジェンダ21フォーラム エコツーリズムワーキンググループからの提案

私たちは、本物をじっくりと味わうことのできる「魅力ある京都」を創出するために、「自然や伝統文化、歴史的町並みと共生できる社会づくり」という視点から施策を考えました。以下に提案します。



2001年6月24日に開催された「自然100選あじわいエコツアー～森との出会い、森での出会い～」（於 法然院の森）
（財）京都市ユースサービス協会 京都市北青少年活動センターと共催。

提案 エコツーリズム、グリーンツーリズムの推進拠点づくり

私たちは、市民・事業者・行政・大学等研究機関のパートナーシップのもと、新しい京都観光を担う人材（市民インタープリターや観光プランのコーディネーター等）を育成することが必要と考えます。

平成十四年度にオープンする「京都市環境保全活動センター（愛称、京エコロジセンター）」を「エコツーリズムの拠点にする」という案が京都市から挙げられていますが、こうした拠点を設け、さまざまな人々が集い、新しい観光について考え、話し合い、取り組むことにより、多様な観光情報の提供が実現されるでしょう。

提案 交通システムへの提案

京都観光の不満の最上位に挙げられている「交通問題」。この問題を解決することにより、観光客が京のまちに対して抱く印象が改善され、また、新たな京都の魅力も創出されると考えられます。現在、京都商工会議所、市民団体などにおいて、新型路面電車の導入が本格的に検討され始めていますが、こうした交通システムの改善と連動し、以下のような取り組みを推進することが有効だと考えます。

一、日時・エリア限定での自動車流入規制実施

自動車流入規制を導入したヨーロッパの都市では、観光客が大きく増加しているという事実があります。また、自動車流入規制のシミュレーション調査によると、観光客の満足度が上がることによって観光客が増加するという結果も出ています。

二、「歩行者優先の観光」の推進

建設省は、都市部の新設道路に関して、車優先から人優先へ転換すると発表しました。また、京都市でも、二〇〇〇年十一月に「まちなかを歩く日」（主催 歩いて暮らせる街づくり推進会議／事務局 京都市都市計画局都市づくり推進課）が開催され、日時・エリア限定での自動車流入規制のもと、町家ツアー、工房ツアーを始めとする、「歩いて楽しむ」ためのイベントが数多く開催されました。期間中、町家ツアーに一〇〇〇人余り、工房ツアーに六〇〇人余りが参加したこのイベントは、翌年度も継続して開催され、地域住民の主導により、今後も継続される予定です。このような取り組みは、まちづくりと交通問題を考える社会実験と検証を進め、「歩いて楽しむ観光」を築いてゆく意義は大きいと考えます。

三、レンタサイクルの仕組みづくり

デンマーク市内では、レンタサイクルに広告をつけることによって、レンタサイクルの仕組みづくりに必要な初期投資費用をまかなう試みが行われています。このレンタサイクルシステムは、現地で大変な人気があると報道されていました。また、京都市内でも、ある宿泊施設がレンタサイクルを導入したことによって宿泊客が増加したという事例があります。

京都は、細い路地が多く、自転車で回るのにちょうどいい規模のまちです。こうした京都の特性を存分に活かし、コンビニエンスストア、ガソリンスタンド、寺社、観光文化施設等の数多くの場所にレンタサイクルを設置することにより、観光客の満足度を増し、多彩な修学旅行コースや観光コースが開発されることなどが期待できると思います。

提案 観光情報のデータベース化とネットワーク化

現在、京都の市民・NPO・観光事業者が、さまざまな観光形態の創造に向けた動きを見せていま

す（町家や寺社等のまちかどを利用した芸術・文化イベント、まち散策プログラム、地域・商店街振興・ものづくり体験プログラム等）。しかし、現状においては、こうした多様な観光情報がデータベース化されておらず、大きな集客をもたらす仕掛けとなっていない。また、ネットワークが未成熟であり、各団体の事務的負担も大きく、プログラム運営が不安定なものになりがちです。

そこで、こうした民間の動きを行政がサポートすることを提案します。すでに実績がある民間のプログラムをサポートすることにより、最少の投資で最大の効果を生み出すことができるのではないのでしょうか。

民間が企画実施する観光プログラムについての情報収集、データベース化、紹介窓口の整備、ネットワーク化によって、行政は多様なプログラムをアピールしやすくなり、一方、プログラム実施を担う個人・団体の活性化も図られると考えられます。そしてこのデータベースを、各種の誘致活動にも積極的に活用（東京の「京都館」、観光案内所、宿泊・食事施設等への情報リーフレット設置、インターネットによる情報発信等）することにより、観光客が新しく魅力ある観光情報にアクセスしやすくなり、京都観光への興味や関心が喚起されることと思えます。

提案 幅広いインタープリター（案内人）の発掘・養成とネットワーク化

訪問先に精通した案内人の存在は滞在先への理解を深めるだけでなく、観光客の旅先における「京都人との出会い」として深く心に刻まれるはず。海外では、観光客と市民とがふれあう場がまちなかに多く設けられ、市民の自然で温かい「もてなし」がまちの魅力を高め、集客を上げている例が数多くあります。しかし、残念ながら京都では、観光客が市民、事業者と触れ合う機会は少なく、観光客と市民は疎遠であるといえるのではないのでしょうか。

京都の観光・歴史文化・自然等に関心をもつ市民は数多く存在します。また、提案に挙げた民間が企画実施する観光プログラムにおいても、インタープリターの不足が深刻な問題となっていること

から、関心ある市民をインタープリターとして養成し、登録するシステムを構築することによって、観光プログラムの多様化とともに、市民の観光への関心が喚起され、市民の観光客に対する意識の向上がもたらされると考えます。

また、既に「京都の魅力」に詳しい在野の人々（町家の所有者、伝統工芸等の職人、研究者、寺社の住職等）を案内人として発掘し、登録・ネットワーク化することにより、人材面における京都の潜在的観光資源が活用できるようになると考えられます。

提案 観光サービスの充実と観光施設における「もてなしの心」育成

宿泊施設等の観光施設は、観光客の「旅の印象」「京都の印象」を決定づける大きな要因です。そして、観光施設におけるサービスの充実には人づくり、つまり従業員教育が不可欠です。

当フォーラムが二〇〇一年四月から実施している京都独自の環境管理認証制度「京都・環境マネジメントシステム・スタンダード（KES）」は、施設の環境管理システムの構築と環境管理を継続的に実施してゆくことを目的とする制度ですが、環境管理を担う一人ひとりの従業員に対する「教育」こそが、このシステムの核となっています。また、観光施設における「環境」という概念には、安全・衛生・バリアフリー等の考え方も含まれています。観光施設がKES認証取得に取り組むことによって、観光客の「滞在環境」をよりよく保ち、ホスピタリティを發揮するための従業員教育が効果的・効果的に行われることが期待できます。そして、環境管理の専門家であるKESコンサルタントが継続的に点検・評価をしていくことにより、サービスやホスピタリティの質が高く維持されてゆくと考えられます。

KESは、継続的に取り組むことによって国際環境管理規格であるISO14001の認証取得につながるように考えられています。京都の中小企業が取得しやすいように工夫されており、取得に伴うコンサルティング費用も非常に安価です。こうした価値あるシステムを有効に活用し、観光施設

における人づくりを充実させることによって、訪れる人の心に残る「もてなしの心」が育成されると考えます。

提案 新しい観光資源の創出

国内旅行が普及して三十年以上経過した現在、京都を訪れる観光客の多くは「リピーター」ですが、近年では「京都には何度も行った」という理由から大阪、神戸等に観光客が「流出」する傾向が見られます。

私たちは、再び観光客の足を京都に向け、京都に留めるために、歴史文化遺産等の従来型観光資源だけではなく、環境、福祉・健康、まちづくり等への取り組みを「新しい観光資源」ととらえることを提案します。

いずれの分野も、すでに市内のNPO・事業者・行政が取り組みをすすめており、近年では修学旅行生が「総合的な学習の時間」に対応したテーマ学習の一環として市内の環境NGO、福祉施設、企業、行政機関等を訪れる機会も急増しています。また、中高年層が京都のより多様な面を知るために、NPOが主催する長期滞在型の京都ツアーに参加している例もあります。

提案 市民参加の実現と幅広い行政部門、団体との連携

京都は、一四〇万人以上の人口を抱える日本有数の大都市でありながら、市街地の真ん中にさえ寺社に守られた自然が息づいています。また、いにしえからの知恵と技術が凝縮した伝統的文化も多く残され、それらは、日本一の観光客数を誇る京都の魅力を支えているといっても過言ではないでしょう。

高度経済成長期以後、京都の自然や、歴史的・文化的に価値あるまちなみは開発の波にさらされました。古都・京都のまちなみの変化に、観光客から苦言が呈されることも少なくなき、したがって、

京都のまちに息づく自然や文化と共生するような社会づくりをめざす必要があると考えます。

観光振興とは「まちづくり」であり、「まち」とは、「自然」、「建物」、「道路」、「店」など、さまざまな「人」の総体です。つまり、あらゆる市民が「まちづくり」に参加することを保障し、参加された市民・事業者・行政等の各セクター、あるいは行政の各部署が、壁をこえて互いに連携することが重要であると考えます。

* * * * *

以上のような施策をより多くの方々と共有し、さらなる議論を深め、共に推進していくことによつて、「エコツーリズム都市・京都」へ向けてのまちづくりが前進します。価値ある、そして一度失われたら容易には取り戻せない京都の自然・文化を、世界中の人々に、そして、京都の次代を担う世代に伝えるため、これからも活発な活動を継続していきたいと思えます。



エコツーリズムワーキンググループ運営会議。月に1回開催され、市民、事業者、行政が円卓を囲み、議論を重ねている。ご関心をお持ちの方は、事務局までご連絡ください。

本書は、2000年4月から2001年3月にかけて、京都新聞朝刊に「『おこしやす』を考えよう！ 観光活性化のためのエコツーリズム」をテーマとして月1回、計12回連載された論稿を、一部加筆修正し、まとめたものです（十倉真未子「環境にやさしい宿泊施設へ～宿泊施設の環境問題に関する宿泊客の意識～」、京のアジェンダ21フォーラム「パートナーシップで築く京都のエコツーリズム」は、本書のための書き下ろし）。

エコツーリズム都市・京都に向けて

2002年2月15日 発行

編・発行者

京のアジェンダ21フォーラム
エコツーリズムワーキンググループ

レイアウト

藤本 芳一

協力

(株)京都新聞社

<事務局>

〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上ル
京都市環境局地球環境政策課内

TEL. 075-222-4037 FAX. 075-222-4039

E-mail ma21f@mbox.kyoto-inet.or.jp

URL <http://web.kyoto-inet.or.jp/org/ma21f/>

印刷

(有)糺書房